

自伝的記憶研究の理論と方法

佐藤 浩一 槇 洋一 下島 裕美
(群馬大学) (北海道大学) (杏林大学)

堀内 孝 越智 啓太 太田 信夫
(東海女子大学) (東京家政大学) (筑波大学)

2004 年 5 月

J C S S T R - 5 1

[連絡先]

佐藤 浩一

〒 371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2

群馬大学教育学部

E-mail : sato@edu.gunma-u.ac.jp

copyright :

Koichi Sato, Yoichi Maki, Yumi Shimojima, Takashi Horiuchi, Keita Ochi, & Nobuo Ohta, 2004

日本認知科学会

事務局

〒 464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院 人間情報学研究科 認知情報論講座内

Tel : 052-789-4891 Fax : 052-789-4752

E-mail : jcass@jcass.gr.jp

Theories and research methods of autobiographical memories^{*1}

Koichi Sato^{*2}, Yoichi Maki^{*3}, Yumi Shimojima^{*4}, Takashi Horiuchi^{*5}, Keita Ochi^{*6}, & Nobuo Ohta^{*7}

要約

「自伝的記憶」とは、人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体である。自伝的記憶についての研究成果は、この 25 年間で急速に蓄積されてきた。しかしながら、多彩な知見が蓄積されている反面、自伝的記憶独自の理論や研究方法の構築は遅れている。自伝的記憶の機能と構造、時間的体制化、生成・再認モデル、感情・情動との関連について、自伝的記憶の理論と研究方法が検討され、今後の方向性が議論された。

key words: autobiographical memory, theory, methodology

*1 本論文は、日本心理学会第 67 回大会(2003 年 9 月 13-15 日)におけるワークショップ「自伝的記憶研究の理論と方法 - 研究の現場から」に基づく。なお著者名の記載順は、ワークショップにおける発表順に従ったものである。

*2 Gunma University

*3 Hokkaido University

*4 Kyorin University

*5 Tokai Women's University

*6 Tokyo Kasei University

*7 University of Tsukuba

はじめに

If there is one topic that binds the various subdisciplines of psychology together, it is memory.
(Ross & Buehler, 1994b, p.55)

「自伝的記憶」とは、人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体である。日常認知研究の隆盛とともに、自伝的記憶についての研究成果も、この25年間で急速に蓄積されてきた(佐藤, 2002)。アメリカ心理学会が編集しているデータベース PsycINFO で、キーワード"autobiographical memory"を入力すると、雑誌論文だけでも年間平均40件がヒットする。しかし、研究の表向きの隆盛とはうらはらに、「結果の再現性が低い」「概念が曖昧である」「記憶理論全体の中での位置づけや独自性が不明確である」といった問題点が指摘されることもある。これは、いわゆる「生態学的妥当性」を追求する「日常認知研究」の大きな波の中で、テーマの面白さに目を奪われ、研究方法や理論をめぐる議論が後回しにされてきたことにもよると考えられる。

自伝的記憶は確かに魅力的なテーマだが、研究方法や理論をめぐる議論を抜きにしてデータを集積することは、長い目で見ると、研究を混乱させる危険性をはらんでいる。Ross and Buehler (1994b)が指摘するように、「記憶」は心理学のさまざまな領域を貫く(あるいは束ねる)テーマとなる可能性を秘めている。しかしそのことは逆に、自伝的記憶が一つの「おもしろい」テーマとして、発達や社会認知などさまざまな関連領域に吸収されてしまう危険性をも意味する。そうならないためには、しっかりした研究方法、頑健なデータ、そしてデータを統合する理論的枠組みが求められよう。

こうした問題意識を背景に、2003年に開催された日本心理学会第67回大会で、「自伝的記憶研究の理論と方法 - 研究の現場から」と題する

ワークショップが企画された。本論文はこのワークショップにおける話題提供ならびに指定討論に基づき、さらに、ワークショップでは十分検討できなかった問題についても議論を深め、今後の理論構築や研究方法の開発について検討することを目的としている。

本論文は以下の構成になっている。まず、自伝的記憶研究に取り組んでいる5名が、自らの研究テーマを中心に、理論や研究方法上の問題を論じる。佐藤は自伝的記憶の3つの機能 - 自己、社会、指示 - を中心に、研究の現況と今後の課題を検討する。槇は自伝的記憶研究の中でもとりわけ頑健な現象とされている「レミニセンス・バンプ」に焦点を絞り、これを説明する理論を検討し、今後の研究方向を指摘する。下島は時間的体制化を検討し、我々が他者と共有するための正確な時間的体制化と同時に、多少なりとも変容した主観的な時間的体制化が存在することを指摘し、自己概念や自己高揚動機との関連を論じる。続けて堀内が、自伝的記憶を記憶システム全体の中にどう位置づけるかという問題を議論する。堀内はエピソード記憶研究で得られた理論や研究方法を自伝的記憶研究に適用し、自伝想起の生成・再認モデルを提唱する。そして越智は、「感情の効果」として検討されてきたフラッシュバルブ記憶やトラウマ記憶について、実は感情以外の要因が大きな影響を及ぼしている可能性を指摘する。

これらの検討を受けて太田が、今後の自伝的記憶研究が乗り越えなければならない理論上・方法論上のハードルを指摘する。そして最後に、著者全員が太田のコメントに対して回答する。

(佐藤 浩一)

自伝的記憶の機能

佐藤 浩一 (群馬大学・教育学部)

自伝的記憶はいったい、何の役に立っているのだろうか？それは決して、心理学者のために存在しているわけではないし、また、老いて後の楽しみや回想法(野村, 1998)のためだけにあるのでもない。自伝的記憶研究はさまざまな方向へと展開しているが(佐藤, 2002), その機能に関する検討や議論が近年は活発に行われるようになってきた(Bluck & Alea, 2002)。その一つの成果が、記憶研究の専門誌 "Memory" の 2003 年 Vol.11, No.2 における「自伝的記憶の機能」特集である。本稿では、(1)自己(self), (2)社会(social), (3)指示(directive)という主要な3つの機能を検討し、今後の課題を指摘したい。

1. 自伝的記憶の機能

(1)自己機能

自伝的記憶は人間に自己の一貫性を与えてくれる。Csikszentmihalyi & Beattie (1979)は成人の生活史の分析から、子どもの頃の問題の認知的・情動的表象が「ライフテーマ」として、現実世界に対する認知や対処方法の基礎になっていることを指摘した。例えばある人は両親が移民であったために不当な扱いを受けた。そのことが彼のその後の選択を方向づけ、法律家としてマイノリティの権利を守る職業を選ばせたのだと回想している。Habermas & Bluck (2000)によると、このように自分の人生を一貫したライフストーリーとしてとらえようとする動機や認知は、特に青年期に発達するという。

パーソナリティ特性との関連を検討した研究からも、自伝的記憶が自己と深い関わりがあることが示唆される。これまで自我同一性地位(Neimeyer & Metzler, 1994; 植之原, 1993), 自我同一性達成度(野村, 2002), 生殖性(McAdams, Hart, & Maruna, 1998), 社会的動機(Woike, Mcleod, & Goggin, 2003), 人生満足度(野村・橋本, 2001), Y-G の情緒安定性と活動性(神谷・

伊藤, 2000)等々のパーソナリティ特性と自伝的記憶の想起内容や語りの特徴との関連が指摘されている。

「望ましい自己像」の一貫性を維持するために、時には非常に巧みな「記憶の再構成」が行われることもある(Wilson & Ross, 2003)。例えば過去の自分を実際以上に否定的に評価したり、あるいは、失敗経験を実際よりも遠い過去の出来事として想起することで、人は「現在まで成長し続けている自分」を確認できるのだ。

(2)社会機能

我々は会話の中に自分自身の経験を盛り込むことで、人に何かを教えたり愉しませたり、あるいは会話の内容の本当らしさを高めることができる(Ross & Buehler, 1994b)。それに対して聴き手が共感的に応答することで、ストーリーはいっそう精緻なものになる(Bavelas, Coates, & Johnson, 2000)。

また集団が記憶を共有することで、メンバー間の親密度が高まったり、集団としての動機づけが高まるという効果も指摘されている。例えば、スポーツチームのメンバーが大事な試合に破れた記憶を共有することは、単に「あきらめるな！」という以上に、彼らを強く動機づける(Pillemer, 1992)。さらに、全く同じ出来事を共通に経験していなくても、時代や類似の経験を共有し語り合うことは、同世代や同郷人としての集団的なアイデンティティの形成にも寄与する(Holmes & Conway, 1999; 小林, 1987, 1998)。このように記憶を共有することが集団の凝集性を高めると考えると、反対に、記憶を共有しない新参加者が集団に加入することの困難さも了解されるであろう。

自伝的記憶の発生そのものが、社会的な文脈と深く関わっていると考える研究者もいる。例えば Fivush は親子の会話を分析し、会話の中で

大人が子どもに過去の語り方を伝えているのだとしている(e.g., Fivush & Reese, 2002)。また Nelson (2003)は、変化の激しい現代社会において、人は自分だけのライフストーリーを構築する自由と義務を負うのだと指摘している。

(3)指示機能

自伝的記憶は経験の宝庫であり、将来に向けて動機づけたり価値観や態度を確認する際の、重要な参照点となる。佐藤 (2000)は教員養成系学部の大学生を対象に、小学校から高校までの教師にまつわる記憶を収集した。すると「こうしたことがきっかけで教師になろうと思った」「この先生の影響で自分はこうなった」といった記憶が多数見出された。Pillemer (1998, 2001)は自伝的記憶のこうした機能を「出発点」「ターニングポイント」と呼んでいる。

さらにこうした記憶は、頻繁かつ鮮明に想起されていることがわかった。その過程で「アンカー(係留点)」として、自分の態度や価値観や動機づけを再確認するのに用いられることもあるのだろう。ところで、実際に何がその人の態度や動機づけに影響しているかということは、正確には特定できない。しかし、「あれがきっかけで」というかたちで、一つの出来事を「原因」や「きっかけ」として認識することは(原因帰属の誤りやバイアスはあるだろうが)、一貫したシンプルなライフストーリーを構築することを可能にする。

人は失敗経験から何らかの教訓を引き出し、それを類似の場面で生かすことがある。このように自伝的記憶は、その出来事を経験した時と類似した状況で想起され、行動や判断を決めるのにも役立つ。Pillemer はこれを「類推」の機能と呼んだ。このようなかたちで自伝的記憶が果たす機能は、思考研究でいうところのアナロジー推論や教訓機能、あるいは学習心理学での転移と関連が深い。こうした機能を果たしている時、エピソード記憶(自伝的記憶)と意味記憶(教訓)が相互に作用しつつ - 目前の問題から喚起された自伝的記憶が教訓を引き出す、あるいは

は教訓を想起するとともに自伝的記憶も再活性化される - , その場面で生かされていると考えられないだろうか。社会的問題解決パラダイム(Goddard, Dritschel, & Burton, 2001)でオンライン・プロトコルを検討すれば、こうした相互作用の一端をとらえることができるかもしれない。

2. 今後の課題

このように自伝的記憶の機能として「セルフ」「社会」「指示」の3つが指摘されている。ただしこれらは相互に排他的なものではない。自らの態度を確認する指示機能や世代アイデンティティの根底にある社会的な記憶は、自己機能と密接に関連している。また他者との会話で得た教訓が、指示機能を担うこともある。その意味で、いずれの機能が最も基本的かという議論はあまり有益ではなかろう。ここでは今後自伝的記憶の機能を検討する際に考慮すべき点を三つ指摘したい。

(1)大学生への偏り

自伝的記憶研究の対象者は、大学生に偏っている(Webster & Cappeliez, 1993)。しかしながら自伝的記憶は、世代によって特徴的な機能を果たす。例えば Webster (1997)は、教育や情報提供という社会機能は 30 歳から 40 歳代にかけて増加することを示した。

高齢者の回想を扱った研究からは「退屈を軽減する」「辛い経験を再現する」という、自己・社会・指示に収まりきれない機能も指摘されている(Webster, 2003)。回想研究から抽出された機能と自伝的記憶研究から指摘されている機能の関連は、今後の研究課題である。

(2)構造と機能

自伝的記憶は、きわめて個別的・特定の感覚印象から、抽象的な自己知識やライフテーマにまで至る、階層構造として表象されている。構造のレベルによって、それぞれ異なる機能を果たしている可能性はないだろうか？

自伝的記憶の研究では - 機能の検討を目的としたものに限らず - , 「1日(数時間)以内の特定の(specific)な出来事」の想起を求めることが多

い(e.g., Wright & Nunn, 2000)。こうして引き出された特定性の高いエピソードは、他者に情報を与えたり愉しませたり、会話に説得力を付与するなど、対人場面で有益な機能を果たすと考えられる。また、アナロジー推論を働かせて自伝的記憶を目の前の問題に応用するには、適度に抽象的かつ具体的な情報が有効なことから(山崎, 2001)、こうした記憶は問題解決の機能にも関わっていると推測される。

ところが協力者の自然な回答に委ねていると、「小6の担任は徹底的に自主性を身につけるよう働きかけてくれた。今の自分が自主的に行動できるのは、この先生のおかげだ」といった、スキーマ化した記憶が報告されることもある。その人の「動機づけ」や「ライフストーリー」にとっては、それが最適レベルの抽象度であり、それ以上細分化したり、より特定の記憶を検索することには、あまり意味がないのかもしれない。もちろん求められれば、個々のエピソードを掘り出すことはできるだろうが、それら一つ一つが現在の自分と結びついていると意識しているわけではないし、個別の記憶を想起して今の自分と結びつけても、実験者からの要求に応えているだけという可能性もある。

このように、特定のレベルから抽象的なレベルまで、構造のレベルに応じて異なる機能を果たしている可能性も考えなければならない。

(3)いつ記憶に立ち返るのか？

自伝的記憶がさまざまな機能を果たしているとは言え、日々の選択や問題解決は比較的自動的に、「マインドレス」(Langer, 1989)に進行している。特定の自伝的記憶を意図的に想起することは時間もかかるし処理資源も消費するため、いつもそこに立ち戻るわけにはいかないだろう。また、ひとたび態度や価値観あるいはライフストーリーや自己スキーマが固定してしまうと、一々もとの出来事に立ち返る必要もなくなる。Pillemer (1998, 2001, 2003)はスキーマやスクリプトなどの抽象化された認知システムに対して、「1回限りの出来事の記憶」の重要性を強調し

た。しかしそれを強調しすぎることもまた、認知システム全体を考察する上では、フェアではあるまい。Klein & Loftus (1993)はかつて、自己に関する判断(例えば「自分は親切な人間か」)に際しては、抽象化された自己知識が利用されるのであり、わざわざ個別の自伝的記憶までアクセスしていないと指摘し議論を呼んだ。

どのような場合に、あるいはどのくらいの頻度で、人はわざわざ自伝的記憶を想起するのであろうか。個別の自伝的記憶にまで立ち返るのは(自伝的記憶がその機能を発揮するのは)、限られた状況ではないだろうか。例えば、(1)スキーマができていないので個別の記憶に頼らざるを得ない、(2)既存のストーリーでは納得できずストーリーを書き換えたい、(3)自分にとってきわめて重要な問題であり、意志決定に至るまでに、自伝的記憶を含めてさまざまな情報を精緻に処理する必要がある、(4)確かに自分がその出来事を経験したことを確認したい(リアリティ・モニタリング)、といった状況が考えられる。

あるいは、処理資源を消費し意図的に想起しなくとも、無意図的に想起された自伝的記憶も、同様の機能を果たし得るのだろうか(神谷, 2003)。例えば問題解決に過去経験を生かす「指示機能」の場合には、時間と資源を投入して想起するのでは役に立たない。むしろ何かのきっかけで重要な記憶が不随意的に想起されて目前の判断に利用され、あとは利用されたことさえ忘れられてしまう、という方が適応的であろう。その意味で指示機能は、他の機能に比べると、とらえにくいものかもしれない(Pillemer, 2003)。

(4)最後に

本稿では自伝的記憶の機能に関連する知見を簡潔にレビューし、さらに今後の研究に求められる視点を提起した。自伝的記憶の機能を検討することは、記憶システム全体における自伝的記憶の位置づけを明らかにするのにも、役立つであろう。三つの機能の存在を作業仮説として、多面的な検討が求められる。

ライフスパンにおける自伝的記憶の分布 - レミニセンス・バンプの研究に関する問題 -

槇 洋一 (北海道大学大学院・文学研究科)

認知心理学において、自伝的記憶は、1970年代から主に日常記憶研究の中で扱われてきた。その関心の1つとして、個人のライフスパンにおける記憶の分布に関する問題、つまり、どの時期に経験した出来事がどの程度再生されるのかといった問題がある。本稿では、個人のライフスパンにおける記憶の分布に関する問題、特にレミニセンス・バンプに焦点を当てて、自伝的記憶の特徴と研究について論じる。

1. 自伝的記憶の研究手法

個人のライフスパンにおける記憶の分布に対する調査は、手がかり語法(cue-word technique)、あるいは特定の出来事に関する記憶(specific event memory)を想起させる方法で主に行われている。手がかり語法では、参加者に手がかり語(例えば、水)を呈示した後で、その語に関する1つの過去の経験を想起させ、経験した年齢をたずねる。その際に、鮮明さ、重要性、想起頻度、記憶の視点など想起した出来事に関する記憶の特徴をたずねることもある。使用される手がかり語は基本的には中立的な性質を持つものが用いられている。1つのセッションで呈示される単語は30～50個である。

特定の出来事に関する記憶を想起させる方法では、個人的な出来事や社会的な事件のような特定の話題に関する出来事の記憶を想起させて、経験した年齢や記憶の性質をたずねる。そのとき想起される出来事の数はいくつ程度であり、手がかり語

法を用いた場合よりも少ない。

2. ラIFSスパンにおける自伝的記憶の分布の特徴

上記の方法で自伝的記憶を想起させ、年代ごと(10代、20代など)に集計し、個人の総想起数で各年代の想起数を割り、各年代の想起率を求める。そして、その想起した出来事を経験した年齢と出来事の想起率で布置をとると、ライフスパンにおける自伝的記憶の分布が描かれる(図-1)。その分布には次の3つの特徴があることが知られている。第一に、最近の出来事に関する想起率が高い現象、いわゆる新近性効果である。最近の10年間にあてはまり、時間と想起率との関係がベキ関数で表される。第二に、0歳から5歳くらいまでの想起率がきわめて低い、いわゆる幼児期健忘である。第三に、10代から30代に生じた出来事の記憶の想起量が増加する現象である。この現象はレミニセンス・バンプまたは単にバンプと呼ばれている。新近性効果や幼児期健忘は参加者が若年でも生じるのに対して、バンプは特に高齢者で顕著に生じる。現在、

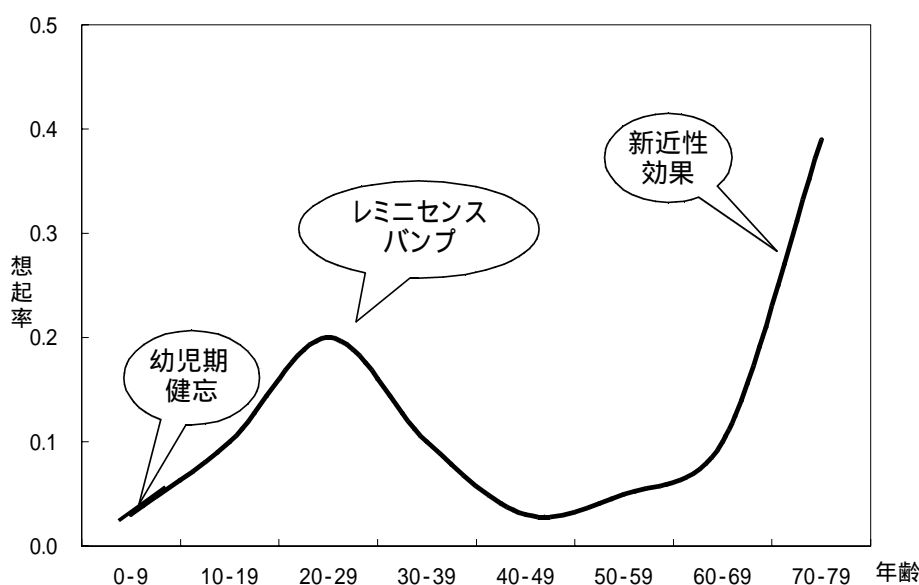


図 -1 ラIFSスパンにおける自伝的記憶の分布

バンブが生じる要因やその理論的説明に関してさまざまな議論が行われている。

3. バンブの生起に関わる要因

参加者の年齢はバンブの生起に関わる重要な要因である。被験者の年齢が60歳代以上の場合にははっきりと生じ、50歳代でも顕著ではないが生じるが、40代より下の世代ではバンブは生じない(Rubin & Schulkind, 1997a, 1997b; Rubin, Rahhal, & Poon, 1998)。しかし、その一方で、対象を30代や40代にした調査でもバンブが生じるという報告もなされている(Jansari & Parkin, 1996)。また、バンブの生起には参加者の個人差や障害は関係ないようである。過去の経験を想起する頻度に大きな個人差があるにもかかわらず、バンブが生じている(Rubin & Schulkind, 1997b)。さらに、80歳の健常群、痴呆群、抑うつ群を比較した研究でも、全ての群においてバンブがみられている(Fromholt, Mortensen, Torpdahl, Bender, Larsen, & Rubin, 2003)。こうした研究から、60歳以上の高齢者を対象にした場合に、バンブは頑健にみられるといえるであろう。

想起の手がかりもバンブの生起に関する重要な要因である。手がかりに単語を使用した研究だけでなく、個人にとって重要な出来事の記憶(Fitzgerald, 1988)、鮮明に覚えている出来事の記憶(Cohen & Faulkner, 1988; Cohen, Conway, & Maylor, 1994)、感情を伴う出来事の記憶(Bernsten & Rubin, 2002; Rubin & Bernsten, 2003)といった特定の出来事の記憶を想起させる方法でもバンブが生じることが報告されている。例えば、参加者に鮮明に覚えている5つの社会的な出来事を想起するように教示し、10 - 30代間に起きた出来事が想起されやすいことが示されている(Cohen, Conway, & Maylor, 1994)。このように特定の出来事の記憶を想起させる方法は手がかり語法に比べて想起させる出来事の数が少ないにもかかわらず、バンブが生じている。さらに、手がかり語法と特定の出来事の記憶を想起させる方法の両方で同一の参加者に課

題を与えた場合に、両者でバンブが生じることが示されている(Rubin & Schulkind, 1997a)。

しかし、手がかり語を用いた研究において、記憶の重要性や記憶の鮮明さに関して主観的に評定させると、バンブの時期にある出来事とその他の時期の出来事の間には差がなく、バンブの時期に想起している内容は必ずしも鮮明でないことや重要ではないことが示唆されている(Jansari & Parkins, 1996; Rubin & Schulkind, 1997a)。

こうした結果の違いは方法の違いに由来している。手がかり語法の方がサンプリングしている個数が多いので、想起された10代から30代間に起きたさまざまな出来事が想起されている。そのため、必ずしも重要であったり、鮮明に覚えているわけではないことを反映していると考えられている(Conway & Pleydell-Pearce, 2000; Rubin & Schulkind, 1997a)。

4. バンブの時期

個人のライフスパンにおいてどの時期にバンブのピークがあるのかについても異なる結果が報告されている。多くの研究において、バンブのピークは20代に示されている(Rubin & Schulkind, 1997a, 1997b; Rubin, Rahhal, & Poon, 1998; Holmes & Conway, 1999)。しかし、教示や手がかりの違いによってピークの位置が変わることがある。なるべく昔のことを思い出すように教示する群と教示をしない群を比較すると、教示群の方では10代前半にピークが見られた(Jansari & Parkin, 1996)。さらに、手がかり語法による群と匂いを手がかりにした群とを比較すると、匂いを手がかりにした方が10歳未満の時期にピークが示されていた(Chu & Downes, 2000)。また、移民や内戦などを経験した人はその時期にピークがあるという研究もある(Conway & Haque, 1999; Schrauf & Rubin, 1998)。

こうしたバンブのピークの違いは、バンブの原因をどのように説明するかに関わってくる。

5. バンプの原因

バンプが起きる原因については、認知的な視点、社会発達の視点からさまざまな説明がなされている。認知的側面からの説明には、記憶の新奇性、生物学的説明、ライフ・スクリプトがある。記憶の新奇性による説明によれば、新奇性と示差性が高い出来事は精緻化されやすく、他の出来事との弁別がされやすいので、相対的に安定して長期間保持される。安定する時期が長く続くことで、リハーサルの機会や手がかりの安定性も増加し、記憶を組織化する時の参照点として機能するようになる。このことがバンプの原因になっていると考えられる(Jansari & Parkin, 1996; Schrauf & Rubin, 1998; Chu & Downes, 2000)。生物学的説明によると、バンプが生じるとされる10代から20代の時期が、個人の認知的なパフォーマンスが最も優れているからであると考えられる(Schrauf & Rubin, 1998)。記憶の検索に関わる文化的要因の影響を指摘しているのがライフ・スクリプトである。ライフ・スクリプトとは、文化的規範、典型的なライフコースの内容や順序に対する期待に関する意味的な知識であり、ライフコースにおけるそれぞれの移行的(transitional)な出来事は一定の年齢範囲内に起きることが想定されている。このライフ・スクリプトが自伝的記憶を検索する時に関与することによって、バンプが生じるという仮説である(Berntsen & Rubin, 2002; Rubin & Berntsen, 2003)。

一方、社会発達の説明では、青年期にアイデンティティが確立されることが指摘されている。アイデンティティを確立することが青年期を重要にし、これによって、その時期に生じる出来事を優先的に保持するために起きるとされている(Holmes & Conway, 1999; Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。

以上のように、それぞれの視点からさまざまな説が提唱されているが、どの要因がバンプの生起に決定的であるのかはまだ不明な点が多い。その理由としては、単一の要因ではなく、いく

つかの要因が合わさって生じる現象であるという可能性が考えられる。しかし、別の問題としては、仮説間の関係が概念的に分離しにくいという問題があげられるだろう。ライフ・スクリプトはアイデンティティの確立と大きく関わっているだろうし、そこで経験される出来事は、新規性や示差性が高いと考えられる。

6. 今後の課題

このような問題を解決し、認知的側面と社会発達の側面のどの要因がバンプに関与しているのかを検討する方法の1つとして、自伝的記憶の機能的側面からのアプローチが考えられる。自伝的記憶の機能として、自己の一貫性を維持し、社会的相互作用を促進し、現在または未来に関するプランニングを行うことが提唱されている(Pillemer, Picariello, Law, & Reichman, 1996)。こうした機能のうち、社会的相互作用を考えると、対人関係は、記憶の新奇性、示差性を高めるであろうし、アイデンティティの形成にも関与するであろう。

しかし、機能的側面から説明することも、バンプの原因に対する可能性の1つを示しているに過ぎない。将来的には、アイデンティティを含むような包括的な記憶モデルによって説明される必要があるであろう。このためのモデル構築が今後の研究によって発展していくことが望まれるところである。

謝辞 本稿は仲真紀子教授(北海道大学)との共同研究(未発表)に基づくものである。執筆にあたり、適切なお助言やご指導を頂いたことへの感謝を記す。

自伝的記憶の研究方法はさまざまであるが、多くは、想起された1つの出来事の正確さや内容を対象としたものである。しかし、我々は過去を断片化した出来事の寄せ集めとしてみなしているのではない。出来事間につながりをもたせ、現在との関係性を構築する。このプロセスを経て初めて、過去の経験が現在の自分と連続性をもった「自伝的記憶」となる。

時間的に拡張した記憶の研究としては、セルフ・ナラティブの研究があるが、本章では、想起された複数の記憶を、時間軸上で我々はどのようにまとまりをもたせているのかについて、発達の知見を含めて検討したい。

1. 経験した出来事を順序づける能力の発達 - 幼児期健忘と自伝的記憶の生起 -

3歳以前に経験した出来事の想起が少ない現象は「幼児期健忘 (childhood amnesia, infantile amnesia) と呼ばれ、非常に頑強な現象として知られている (Rubin, 2000)。一方、Fivushらは、3歳以前の子どもでも、過去に経験した新奇な出来事を正確に想起できることを示している (Fivush, 1984; Fivush, Gray, & Fromhoff, 1987; Hudson, Fivush, & Kuebli, 1992; Hudson & Nelson, 1986)。3歳以前に想起することができた記憶を、大人になると想起できなくなるのはなぜか？ Nelson (1992)は、自伝的記憶の生起要因は、言語を介して他者と記憶を共有することであり、それによって記憶の社会文化的意義が生まれるとし、母子会話の役割をあげている。一方、Fivush (1988)は自己概念が自伝的記憶の生起に重要な役割を果たすとす。幼いうちは現在に関する知識しか持てず、意識が自己の歴史に及ばない。しかし、自己の概念が時間的に広がるにつれて、歴史的自己が知覚されるようになり、出来事をその中に組み込むことができるようになっていく。この自伝的記憶の発生以前、つま

り自己の歴史を作る以前においては、出来事はたとえ認知されていても、その中に組み込まれようがない。これが幼児期健忘である。Friedman (1992, 1993)は、過去を時間的に構造化する能力の発達が自伝的記憶の発生と関係があるのではないかと考えた。時間的位置の表象には発達の複数の段階が存在し、最も基礎的な段階では、ある出来事が結びつき得る独立の時間カテゴリー (季節・月・曜日など) を認識するが、それらの時間情報どうしが関連を持つことには気づかない。

尾原 (1994)は、4,5,6歳を対象として、過去1年間の出来事の想起とその順序判断を行った。4歳児は特定の過去のエピソードを正確に想起することができたが、出来事を順番に並べるとは難しく、6歳になるとほぼ正確に順番を並べることができた。また、順序判断は2回行ったが、4歳では2回の順序判断が一致していなかったが、6歳ではほぼ一致していた。以上より、幼い子どもは個々の出来事を正確に記憶することはできるが、出来事をつなぐを構築することが難しいことが示唆される。自伝的記憶の想起には、自分の過去を時間的に体制化する能力が必要であると考えられる。

2. 自伝的記憶の構造

- 成人してから想起する過去の時間軸 -

Conway & Pleydell-Pearce (2000)は、自伝的記憶の階層構造を提唱している (Sensory-Perceptual Episodic Memory, General Events, Lifetime Periods)。尾原・小谷津 (1994)は、Lifetime Periods 内の出来事、Lifetime Periods 間の出来事の順序判断の反応時間を調べることにより、自伝的記憶の時間的体制化について調査した。その結果、幼稚園時代の出来事においては、Lifetime Periods 間 (学校 - 家) の2つの出来事の順序判断の方が、Lifetime Periods 内 (学校 -

学校、家 - 家)の2つの出来事の順序判断よりもRTs が短かった。小学校時代については、この反対であり、中学校、高校の出来事については、差がなかった。自伝的記憶は、たった一つの時間軸から成り立っているとは考えにくい。おそらく、いくつかのテーマに沿った複数の時間の流れが存在し、それらの時間軸は所々で接点をもつことにより、ゆるやかなまとまりをもって自伝的記憶という一つの過去を構成しているであろう。幼稚園時代の記憶では時間軸間の判断が速く、小学校時代の記憶では時間軸内の判断が速く、中学高校時代の記憶では時間軸間と時間軸内では反応時間の差がなくなるというこの結果は、時間軸の統合過程について示唆を与えるものである。高齢者で同様の調査を行うことにより、レミニセンス・バンプの時期の時間的体制化と、レミニセンス・バンプ以前、以降の時間的体制化の質的相違を調べることも興味深いと思われる。

3. 他者と共有するための正確な時間的体制化と主観的な時間的体制化の共存

自伝的記憶の研究は、「想起の正確さ」と「変容の度合い」に注目するものがある。一方で、Shimojima (2002)は、我々は、他者と記憶を共有するための正確な時間的体制化と同時に、多少変容した主観的な時間的体制化を行っているとしている。「大学に入学したのはいつか」「結婚記念日はいつか」。これらの時期は、社会的に正確に記憶しておく必要がある。しかし、自伝的記憶の時間軸上では、これらの出来事の主観的位置は変容可能である。実際の生起時期を知っていたとしても、我々は過去を「ずっと昔」あるいは「つい最近」として変容して認識することがあり、この現在から過去までの主観的距離の変容は、想起時の状況により左右されると考えられる。Ross & Wilson (2002)は、望ましい過去は主観的に最近に感じられ、望ましくない過去は遠くに感じられることを示し、これは自己高揚感を高めるためであるとした。個人的出来事の主観的距離の変化により、そのエピソード

についての日付や直接関係のある事実を歪めることなく、自己高揚という目標を満たすことができる。

一方、Shimojima (投稿中)は、人生の転機となった出来事の主観的経過時間について調査を行った。当時と現在とでその出来事のとりえ方が同じであるか、異なっているかによって2群に分けたところ、異なる群は同じ群よりも出来事をより最近に感じていた。重要な過去の出来事を新たな観点でとらえなおすことにより、より最近に近く感じられるのである。また、異なる群の多くは「当時ネガティブ 現在ポジティブ」へと変化していた。これは、当時ネガティブだった記憶を現在ポジティブにとらえなおすことにより、主観的に最近の出来事として、つまり現在の自己の一部とみなすことができると考えられるであろう。ネガティブな経験はいつまでも否定的な意味合いを持つのではない。当時は辛い経験であったとしても、その経験のおかげで今の自分があるとポジティブにとらえなおすことにより、その出来事は現在の自己概念の一部として、主観的に最近に感じられるのである。

また、Ross らの主張するように、自己高揚動機が主観的経過時間と関連するのであれば、文化差を考慮する必要がある。Kitayama, Markus, Matsumoto, & Norasakkunkit (1997)によると、アメリカ人は自己高揚に従事しやすいのに対して、日本人は自己卑下に従事しやすい。自尊心と主観的経過時間の文化差の有無についても今後検討する必要があるであろう。

レミニセンス・バンプの研究では、15 ~ 25歳に経験した出来事の想起量が多いことが知られている。現在から過去までの主観的経過時間は記憶の分布と関係するのであるだろうか。自己概念の確立と関係があるとされるレミニセンス・バンプの時期の記憶は、より「最近」として認識されるのであろうか。下島・有馬 (2003)の質問紙調査では、レミニセンス・バンプにおける主観的経過時間の特異性は示されなかった。面接

法により、個人ごとの記憶分布と主観的経過時間の関係性をより詳細に調べることにより、自己概念の確立と主観的経過時間の関係が明らかになるのではないだろうか。

以上のように、正確な記憶、変容した記憶にとどまらず、記憶の主観的な側面に注目することにより、今までは見ることでできなかった自伝的記憶の新しい側面を見ることができるであろう。

4. 将来のために積極的に変容される過去

- ポジティブな主観的自伝的記憶研究 -

なぜ我々は過去を想起するのか。なぜ、意識的に想起できる記憶と想起できない記憶、正確に想起される記憶と変容した記憶が存在するのか。

過去は、事実そのままに、正確に想起すればよいわけではない。現在に適応するために、そして将来に役立つための過去を構築すればよい。もちろん、過去を事実と全く異なるものとして想起したり、好ましくない出来事を全て忘れてしまったら、社会生活を送ることは困難になる。ある程度、周囲の人間と過去を共有できる範囲で、個人的な出来事は多少変容させ、多少忘却することが必要である。その意味で、公共的出来事は他者と記憶を共有するための枠組みとなるであろう。

個人的出来事においても、出来事が生じた時期というのは、正確な時期を比較的確認しやすいものである。よって、個人によってある出来事の生起時期を全くばらばらに想起することは、過去の共有を困難にさせる。もっとも、過去の出来事の生起時期の想起は比較的正确であるとされている。しかし、現在への適応、将来への展望にとってその出来事が持つ意味合いは、個人によってさまざまである。ある程度正確な出来事内容と生起時期を保持しつつ、現在への適応、将来への展望にとって適応的な自伝的記憶を構築するためには、意識すれば正確に想起できるけれども、主観的には「実際よりも昔」に感じたり、「実際よりも最近に感じる」という

主観的距離感覚の変容が有効であると思われる。先に、自伝的記憶の中にはいくつかのテーマに沿った複数の時間の流れが存在し、それらの時間軸は所々で接点をもつことにより、ゆるやかなまとまりをもって自伝的記憶という一つの過去を構成しているのではないかと述べた。過去を想起する際、どのテーマの時間軸を中心として想起するのかによって、他の時間軸の時間の流れ方は異なって感じられ、結果として主観的経過時間も異なってくるであろう。自伝的記憶は、どの側面からとらえるかによって、その時々で全く異なる様相をみせる。しかし、その時々で全く異なる過去を想起するのでは、他者との記憶の共有が困難となる。自伝的記憶には、他者と共有するための「事実としての自伝的記憶」と自分だけのための「主観的な自伝的記憶」があるのではないだろうか。そして我々が調査で得る情報はおそらく、他者と共有するための「事実としての自伝的記憶」である。今後は、「事実としての自伝的記憶」の中の「正確な記憶」「変容した記憶」「忘却された記憶」を扱うだけではなく、「正確な事実は知っているけれど、主観的には事実と少し異なって感じられる記憶」という「主観的な自伝的記憶」を扱うことが、自伝的記憶研究の将来にとって必要になってくるのではないだろうか。

自伝想起の生成・再認モデル

堀内 孝 (東海女子大学・人間関係学部)

1. はじめに

この十数年で自伝的記憶を扱った研究は飛躍的に増加している。しかしながら、それらの多くは被験者に自伝的記憶を想起することを求め、その内容を分析したものが大半である。自伝的記憶の内容に関する研究それ自体の重要性は否定しないが、注意しなければいけないことは、想起内容は想起する際の手がかりや気分、その直前の経験や思考内容、さらには、想起する際の対人的・社会的・文化的文脈によって容易に変わり得るということである。この変動性は、自伝的記憶が想起時に再構成されるものであるからに他ならない。また、近年盛んになりつつある社会構成主義では、自己に関する記憶は単なる記憶ではなく、解釈し意味づけられた物語 (narrative-self) だとする見方が主流である (e.g., Neisser, 1993; Grene, 1993; Gergen & Gergen, 1988; Bruner, 1994; Dennett, 1991)。このような観点を鑑みれば、今日までの自伝的記憶の研究で得られた想起内容というのは、人間の自伝的記憶としてどこまで一般化可能なのが疑わしい。極端な場合、自伝的記憶は一期一会で、一般化不可能だという立場もあり得るが、ここでは一般化を探る方向で議論を進める。

ある特定の検索条件で得られた想起内容を一般化するひとつの方法は、想起のプロセスモデルに準拠し、想起状況が持つパラメータによる変動を加味して、当該の想起内容を評価することである。しかし、自伝的記憶研究において、自伝的記憶の想起プロセスモデルを検討した研究は少ない。以降ではそのような問題意識のもとに、エピソード記憶研究の知見に立脚した自伝想起の生成・再認モデルを提唱する。

2. 記憶システム論における

自伝的記憶の位置づけ

いわゆる実験室で行われたエピソード記憶研

究に、自伝的記憶を位置づけることから始めたい。Tulving (e.g., 1983, 1993)によると、人間の宣言的な長期記憶は、意味記憶システムとエピソード記憶システムに分類される。Klein & Loftus (1993)は、一連の研究 (e.g., Klein, Loftus, & Burton, 1989; Klein, Loftus, & Plog, 1992; Klein, Loftus, Trafton, & Fuhrman, 1992)から、自己知識は、意味記憶システムにおける抽象化・概念化された自己知識(自己概念)と、エピソード記憶システムにおける具体的な自己知識(自伝的記憶)に分類できることを指摘している。ここでいう自己概念と自伝的記憶は、Neisser (1993)のいう概念的自己 (conceptual self) と想起される自己 (remembered self) に概ね対応する。エピソード記憶システムの方が自伝的記憶よりも上位の集合であることは、エピソード記憶システムが自伝的記憶だけでなく、他者の行動のエピソードをも包含することからも支持されよう。

3. 自伝想起の生成・再認モデル

自伝的記憶をエピソード記憶システムの下位集合とみなすならば、自伝的記憶の研究にエピソード記憶研究で得られた理論や研究法が適用可能になる。

(1) 検索の意図性と直接性

自伝的記憶を想起するためには何らかの手がかりが必要であり、その手がかりの性質が自伝想起のプロセスを規定する。手がかりが記録時に符号化されたものと近似していれば直接検索が行われる可能性が高くなる。しかし、実験で使用される手がかりの場合は、個人の符号化属性とは直接関係がないため、間接検索が行われる可能性が高くなる。

想起における意図の有無も重要である。すなわち、手がかりから意図せずに思い出す場合(無意図的検索; implicit)と、意図的に思い出す場合(意図的検索; explicit)がある。日常場面におけ

る自伝想起は無意図的検索が大半であると考えられる。しかし、研究においては、実験の手続きの関係で意図的検索を求めることになる。

以上をまとめると、一般的に研究で扱われてきた自伝的記憶とは、間接検索を喚起する手がかりを用い、意図的に想起されたものということができる。

(2) 自伝想起の生成・再認モデルの検証

間接検索を喚起する手がかりを用い、意図的に想起することは、手がかり再生と同一の処理プロセスを行っていると考えられる。手がかり再生に関する検索モデルに Jacoby & Hollingshead (1990)の生成・再認モデルがある。このモデルでは、検索手がかりを与えられて学習語を再生する場合、まず反応項目を生成し、次にその項目が学習語であるかを再認するとされる。

堀内は、自伝的記憶の想起プロセスが、生成・再認モデルに適合するか否かを、主に自己関連付け効果のパラダイムを使用して検証した。自己関連付け効果とは、自己に関連付けた刺激語は、意味的な処理を行った刺激語と比較して、その後の記憶成績が高くなるという記憶現象である。今回の場合、自己に関連付ける処理は、刺激語から自伝的記憶を想起することである。堀内 (2002)では、潜在教示における概念駆動テ

ストを使用した場合、自伝想起課題は意味処理と同程度のテスト成績を示した。意味処理と成績が同じということは、少なくとも自伝想起の一部に語の意味処理に類する処理(生成プロセス)を含むことを示唆する。さらに、顕在教示の概念駆動テストの場合では、自伝想起の方が意味処理よりテスト成績が良いことから(堀内・藤田, 2003)、自伝想起には意味処理以外の処理(再認プロセス)が含まれることが示唆される。また、堀内 (未発表)では、自伝想起ではなく、生成処理だけを行わせたとこ、通常の意味処理と同程度の再生成績を示した。さらに、Conway & Pleydell-Pearce (2000)によると、EEGを用い、自伝的記憶を想起させたところ、検索意図の形成と同時に左前頭葉が活性化し、自伝的記憶の構成とともに左右頭頂葉と側頭葉に活性化が見られた。これらの結果は、自伝想起には生成と再認という二段階のプロセスが存在することを示している。

再認段階ではさらに、Gardiner (1988)によって提唱された Remember/Know 手続を適用することができる。堀内 (2004a)によると、自伝想起において Remember 反応を行った刺激語は Know 反応を行った刺激語より、後の記憶成績が高かった。また、意識的検索を奨励すると意味処理より再生成績が高くなるが、回想を伴わ

ない熟知性検索を奨励するとその再生成績は意味処理と同程度であった(Horiuchi, 2003)。以上の結果から、自伝想起の検索段階には意識的回想と自動的検索があり、意識的回想を行うことにより、エピソード記憶システムへのアクセスが行われることが示唆される。さらに、堀内 (2004a)によると、他者のエピソードの想起に関しても、再生率は Remember 反応 > Know 反応を示し、その再生率は自伝想起と同じ程度であることから、自伝

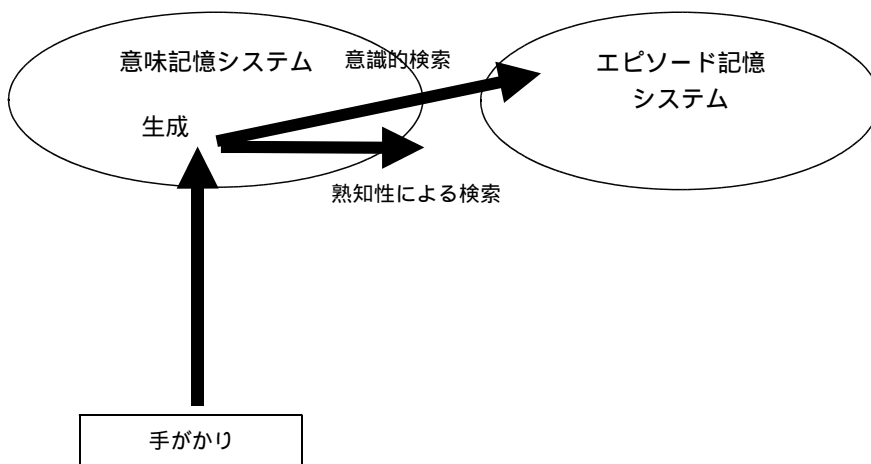


図 -1 自伝想起の生成・再認モデル
(間接検索を喚起する手がかりを用い、意図的に想起した場合)

的記憶も他者のエピソードも、同じ想起プロセスを経て検索されると考えられる。

4．生成・再認モデルの評価と 想起内容の変動可能性について

生成・再認モデル以外の自伝想起のプロセスモデルに、手がかりの記述・探索・評価の三段階を想定する Conway & Rubin (1993)の循環的検索モデルがある。このモデルでは事象の期間にもとづく生涯時期、一般事象、事象固有知識の階層ネットワーク構造を想定し、自伝想起ではこれらの構造間を循環的に検索するという。自伝想起の生成・再認モデルとの最大の違いは、エピソード記憶システムと意味記憶システムの明確な区別をするか否かにある。生成・再認モデルでは自伝的記憶の階層構造を仮定せず、生成段階では意味記憶システムにおけるより自由度の高い意味ネットワークで候補が生成され、再認段階の意識的回想において自伝的記憶のエピソード照合が行われると考える。また、循環的検索モデルでは「出来事」だけの手がかりより、「時期」「出来事」という手がかりを呈示した方が、反応時間が短くなることを階層性の根拠にしているが、生成・再認モデルでは、手がかりの具体性によって符号化属性との共有度が高くなり、直接的な検索が助長された結果、反応時間が短くなったと解釈する。

生成・再認モデルは提唱されたばかりであり、まだ十分に精緻化が行われていない。また、本来の目的である状況変数を扱うパラメータも不十分である。ただ、現状でも検討できる課題はいくつか存在する。例えば、自伝想起における時間的切迫性や認知負荷は、想起の際の意識的回想を下げ、熟知性による検索が優位になることが予想される。

自伝的記憶のいくつかは繰り返し想起され、さらに個人の持つ態度や価値観に添ったかたちで書き換えられる。そのような自伝的記憶は、半概念化した知識と考えた方がよいかもしいし、さらに概念化が進んだ場合は自己概念とみなされる。そのような繰り返し想起され変容

した自伝的記憶の検索に関しては、生成・再認モデルよりも、意味記憶からの検索モデル(多次元処理モデル：堀内, 1998)を適用した方が適切だと思われる。

感情・情動と自伝的記憶の関連

- 本当に感情システムは自伝的記憶に影響を及ぼすのか -

越智 啓太 (東京家政大学・文学部)

自伝的記憶研究において、感情や情動との関係がしばしば問題にされる。確かに我々は「思い出」で心を乱されたり、心を癒されたりすることが、たびたびあり、これらの間には密接な関係があるように思われる。そのため、自伝的記憶と感情を扱った研究は比較的安易にそこで得られた結果を「感情システム」あるいは「情動システム」によるものとすることが多い。しかし、これらの中に何らかの関係があるという前提のもとに研究を進める前に、感情システムを仮定しないで、それらの現象を説明できないかについて十分吟味する必要がある。本論では、そのような観点から、4つの研究領域を取り上げて、批判的に検討してみようと思う。

1. 快記憶、不快記憶の割合に関する研究

快記憶、不快記憶の割合という問題は、自伝的記憶研究の中では、最も古い問題の一つである。今日まで、大量の研究が行われてきた。しかし、現在まで、快記憶優位説、不快記憶優位説が対立し、明確な結論は得られていない(快記憶優位派が現在は有利)。

ところが、この論争は、実験結果がどうかであるかが重視されすぎ、その実験手続きのことまであまり考えられないことが多い。これらの研究では、何らかの方法で、自伝的記憶をたくさん想起させ、想起された自伝的記憶の感情価を測定(評定)し、その割合についての議論が行われることが多い。そして、そこで、産出された自伝的記憶が、「自伝的記憶システム」が持っている、全ての自伝的記憶を代表している標本である、として議論がなされるのである。しかし、社会調査の例をみれば、明らかな通り、得られた結果の妥当性や性質は、どのようなかたちで標本を抽出したかに、かなりの部分で依存する。そこで、自伝的記憶研究においても、そ

れを想起させた方法と得られた自伝的記憶の性質の交互作用にもっと注意を払うべきであろう。

実際に、この分野でなされたいくつかの研究を見てみると、実験方法と、想起された自伝的記憶の性質に、関係がある可能性があることがわかる。例えば、従来の研究では、一定時間にできるだけ多くの記憶を記述させるといった研究では、快記憶の割合が多く、キーワード法や面接法などをとったり、印象に残った記憶をじっくりと記述させると不快記憶の割合が(相対的に)多くなるように思われる(Cowan & Davidson, 1984; 神谷, 1994)。

では、なぜ、このような交互作用が生じるのであろうか。その説明として、すぐに考えられるのは、記憶の感情価や感情システムが関連しているという仮説である。例えば、面接法では、被験者と実験者の間にラポールが形成されることが多く、それゆえ、話しにくいこともいえるのではないかと、などである。しかし、この問題をよく検討してみると、感情以外の要素がこの結果を左右している可能性も否定することはできない。

例えば、越智・太田(1994)は、快記憶と不快記憶では、性質が異なっている可能性があるという指摘している。彼らは、被験者に子どもの頃の記憶を報告させ、その特性について、評定させている。その結果、不快記憶は、「自転車で怪我」や「交通事故」、「ペットの死」など、快記憶に比べて、瞬間的な記憶で時間も特定できる記憶が多かったのに対して、快記憶は「小学校の遠足」、「家族旅行」など、(瞬間でなく)一定の時間経過を伴っているものが一連の出来事全てを含むかたちで報告される場合が多かった。自伝的記憶が階層的な構造をしているとすると、不快記憶では、より下位の特殊化したノードが、

快記憶では、より上位のノードが「記憶」として想起されると考えられる。

そして、上記の実験方法と、そこで想起される記憶の相互作用は、感情価の問題よりも、むしろ、その自伝的記憶がどのような階層のものであるかに、依存しているように思われる。例えば、もし、一定時間にできるだけ多くの記憶を想起させるという課題を行う場合、我々は、自伝的記憶ノードをトップダウンに検索する可能性が大きいと思われる。そして、(できるだけたくさん思い出さなければならない以上)、階層構造を末端までたどることなく、一定の部分で打ち切って、すぐに別の記憶を検索する必要が生じる。このようなかたちで検索が行われると結果として、快記憶の割合が多くなる。これに対して、面接法の場合には、より末端まで、情報をたぐる必要が生じたり、キューワード法では、よりボトムアップ式に、あるいは個々の特殊なエピソードに対してダイレクトな検索が行われる可能性がある。その結果として、想起される内容は、不快記憶の比率が比較的多くになると思われる。

2. フラッシュバルブメモリーの研究

フラッシュバルブメモリーの研究から、情動喚起の度合いが大きいとそれに遭遇した瞬間は、よく記憶されている(Brown & Kulik, 1977)、しかし、その記憶は実際の記憶ではなく、変容してしまっている場合も多い(Neisser & Harsh, 1992)という現象が見出された。この現象は、高い情動性が特殊なメカニズムを発動させる、といった説明がなされることがある。しかし、このような効果が本当に、情動喚起によるものなのかについては、検討することが必要であろう。この問題を取り扱った我々の研究を見てみよう。

越智・相良(2003)は、多くの人に大変なショックを与えた、池田小学校事件を情動喚起事件、田村亮子選手の公式戦敗退を統制事件として、事件が起きた瞬間についての記憶を調べた。まず、事件直後(1日~3日後)に、その事件が起きた時、何をしていたか、あるいはどのような

情報源からその事件を知ったのか、についての調査を行った。次に、その事件の15~17週間後に、もう一度その事件を知った瞬間についての状況を調査し、それらのデータを比較したのである。その結果、まず、第2回目の調査で、「忘れた」と被験者が回答した項目を、調べたところ、図-1のような図が得られた。つまり、池田小学校事件の方が、忘却されにくいというデータであった。次に、1回目の記述と2回目の記述を比較して記述が食い違っている場合をカウントしてみると、図-2のようになった。これは、池田小学校事件の記憶の方が、より変形を受けやすいデータである。つまり、この実験では、「池田小学校の事件では、記憶が長期間保持される反面、変容も多い。田村亮子の事件では、記憶が忘却されやすい」というフラッシュバルブメモリー実験としては比較的、標準的な結果が得られたわけである。

しかし、このような効果は本当に、情動によ

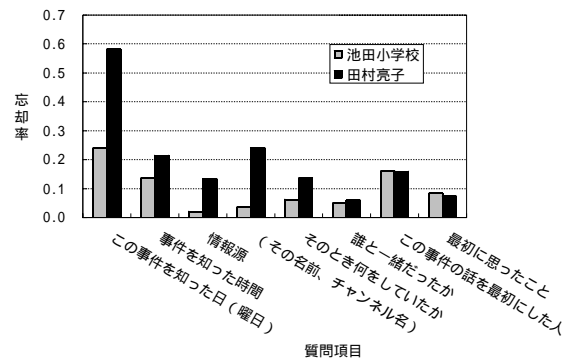


図-1 池田小学校事件と田村亮子事件のフラッシュバルブメモリーにおける忘却

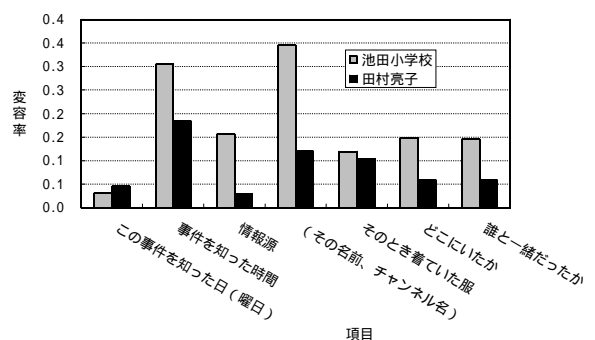


図-2 池田小学校事件と田村亮子事件のフラッシュバルブメモリーにおける情報の変容

って引き起こされているのであろうか。この実験の回答パターンや被験者との事後面接を詳細に検討した結果、次のようなことがわかってきた。それは、池田小学校事件と、田村亮子事件では、事件を聞いた後の被験者の行動が全く異なっていたのである。例えば、池田小学校事件の場合、被験者は、その事件に衝撃を受け、その後、知人や家族に電話をかけ、その事件を話題にしたり、アルバイト先や部活動などでもそのことを話題にする。TVがあれば、その事件について情報を得るためにTVを見続け、場合によってはインターネットなどで情報収集をする。その結果として、今回の質問で聞いた「事件を初めて知った瞬間」の記憶と類似したさまざまな営みがなされてしまうのである。そのため、事件については忘却されないが、「最初に知った瞬間」についてのソース同定は困難になってしまう。これに対して、田村選手の事件の場合には、興味深い事件であるが、それほど話題にはせず、そのまま放置される。それゆえ、忘却される場合も多く、また、「その事件を最初に知った瞬間」を想起するように求められた場合、混同する「その事件を話題にした」経験が少ないために、実際の事件を知った瞬間を思い出すことができるのである。

これは、情動性そのものが、忘却や変容に関係しているのではなく、情動性がその後の被験者の行動を、規定しており、その行動の違いによって、忘却や変容の違いを生み出していることを示している。つまり、情動自体がダイレクトに記憶に影響を及ぼしているという結論はこのデータからはすぐ出てこない。しかし、このようなデータを見てみると、一見、情動性がこのような結果を引き起こしているのだという誤解が生じてしまう可能性が大きい。

3. トラウマ記憶の研究

PTSD(心的外傷後ストレス症候群)の主症状としては、トラウマ記憶現象が存在する。これは、トラウマ記憶が、日常生活で侵入想起されることや、その記憶内容が長期間保持される

という現象である。この現象も一見、強度のトラウマが原因であるように説明されることが多い。ところが、越智・木村(2001)は、単に、ある記憶について「思い出さないように」と教示するだけで、その記憶が、侵入想起されやすくなり、また、忘却も抑制されるということを示した。具体的には、トラウマティックでない刺激フィルムを被験者に見せ、それについて「思い出してはいけない」と教示するだけで、その記憶に関する、その後2日間の侵入想起が増大し(図-3)、また、その刺激内容についての再認テストを行うと、その成績も良くなったのである(図-4)。

つまり、トラウマ記憶現象の一部は、トラウマの特殊な性質によるのではなく、単に、「それを思い出したくない」と考えることによって生じている可能性がある。この現象も、一見、情動喚起の効果に見えるものでも、別のメカニズムで説明できるということを示している。

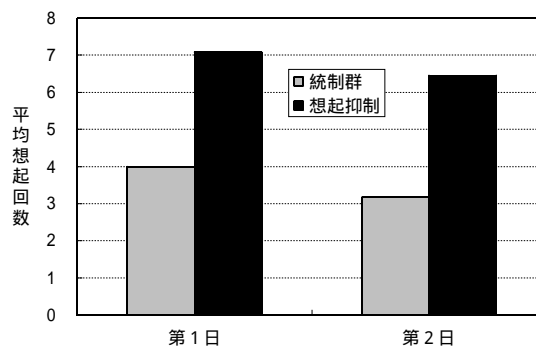


図-3 想起禁止教示による侵入想起の増加

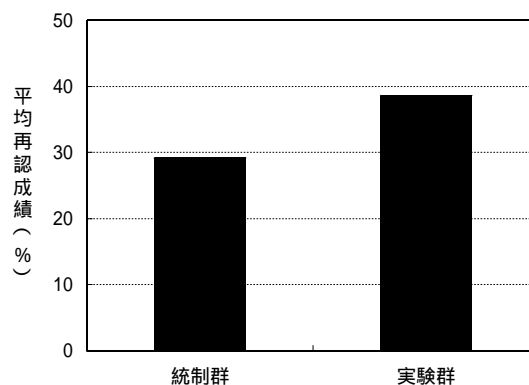


図-4 想起禁止教示が刺激の再認記憶に及ぼす効果

4. レイプ被害者の記憶の研究

レイプ被害者は、事件の記憶が悪いという現象が知られている。例えば、強盗事件に比べて犯人といる時間が長いのに、犯人の顔の再認成績が低いということなどが指摘される。このような現象について、しばしば言及される説明は、レイプのようなトラウマティックな記憶に遭遇すると逆行性の健忘が生じたり、抑圧が生じて、その出来事を想起できないのということである。特にストレスが大きいと思われるストレンジャーレイプ(見知らぬ人によってレイプされる場合)では、この傾向が大きいことから、この説も一見、もっともであると思われがちである。ところが、犯行時の被害者の行動をみると、ストレスが大きい被害の場合、被害者は目をつぶっているとか、犯人を見ていないというケースが多い。

一般に目撃証言の研究で多いことだが、実際の事件現場では、目撃者や被害者は目をつぶることも含めて、視線のやり場や行動にかなりの自由度がある。これに対して、実験室の実験では、被験者は基本的には、スライドやフィルムなどの刺激を見ることを強制される。そのため、実験室研究をもっぱら行っている研究者は、実際の事件現場での行動やその個人差に思い至らないケースが多い。しかし現実には、記憶メカニズム以上に、このような行動や行動の違いから生ずる符号化の差異が、最終的な想起パフォーマンスを規定してしまっている可能性がある(越智, 1997)。

5. 結論

これらの現象のひとつの教訓は、一見、感情が効果を示しているような現象であっても吟味してみると、別の要因が影響している場合があるということである。特に自伝的記憶をはじめとした、日常場面での記憶を扱う場合には、統制できないさまざまな要因が関与してくるため、実験者が想定した要因以外にも注意を払う必要がある。

今後、感情と自伝的記憶の関係について議論

していく場合には、感情や情動以外のメカニズムによって結果が左右されている可能性についてより慎重に検討していく必要があるだろう。

コメント：自伝的記憶研究 - いくつかのハードル

太田 信夫 (筑波大学)

自伝的記憶の研究は、個々人の人生そのものを扱うので、大変難しく、また危険性をはらんでいる。だれの人生も、膨大な経験から成り立っており、それをシンプルな法則や概念で表すことはできない。まただれの人生も、尊厳と個性を有しており、それを平均的データとして扱うには、あまりにも表層的な研究であると言わざるを得ない。

このように大変複雑で個性のある人生に対して、記憶という切り口から、その本質に迫るには、いくつかのハードルを越える努力が必要である。

(1) 想起できない記憶をどのように扱ったらよいか

従来の自伝的記憶研究では、想起された記憶(顕在記憶)を扱っているものがほとんどで、想起意識のない、いわゆる潜在記憶や手続き記憶は無視されている。しかし、想起される記憶内容やその想起プロセスは、潜在記憶や手続き記憶によって支えられていると考えれば、それら無視した理論や研究方法では十分とはいえない。特に、自己概念の形成や意識・行動などに対する、自伝的記憶の機能を考えると、意識化できない記憶の存在を抜きにしては考えられない。

(2) 自伝的記憶における「自己」の概念をどのようにとらえるか

エピソード記憶とは、自己の過去経験を想起した記憶のことをいう。しかし、自己に関する概念や自己に関する知識をエピソード記憶なのか、意味記憶なのかは、議論のあるところである。例えば、自分はこういう性格だという知識と 徳川家康はこういう性格だ という知識との本質的な違いはあるのだろうか、ないのだろうか。このように考えてみると、自伝的記憶における自己とエピソード記憶との関

係をどのように考えたらよいか、という問題は複雑で重要な問題であることがわかる。例えば、ある社会的出来事の記憶と自己との関係には、さまざまなかたちがあったりなかったりする。従って私達は、記憶理論全体の中で、自伝的記憶の位置づけを考える必要があるのではないだろうか。

(3) 記憶の信憑性は問題にしなくてよいのだろうか

記憶には、忘却と変容はつきものである。また想起とは、過去経験の再構成ともいわれる。従って、研究者が得る記憶内容は、オリジナルの記憶を出発点として、さまざまな原因によりバイアスや合理化などの影響を受け、変容し、しかも想起時の心理的物理的状況の影響下での記憶のことである。自伝的記憶は、何十年という超長期の記憶であるので、この記憶保持のプロセスは複雑にして微妙である。このように考えると、同一人が同じトピックを想起しても、年代により少し異なった内容になると考えられる。また、変容のプロセスには、量的質的に個人差もあるだろう。筆者は、このような問題こそ、生身の人間の記憶を扱うおもしろさに通ずるものであると思うのだが、このあたりを研究として見過ごしてもらいたくない。

(4) 想起しても、言いたくない、あるいは言語化できない記憶を、どのように扱うのか

自我の中核に触れる出来事ほど、時と場合によっては、思い出したくない、言いたくないことが多い。従って、質問紙で出てくるデータが想起内容の全てではない。しかし困ったことに、そのような出来事こそ、その人にとって人生の中心的な意味をもつ自伝的記憶であることが多いのも、事実ではないだろうか。自伝的記憶の構造や自己との関係を解明しようとしたり、自伝的記憶のもつさまざまな機能を考えようとす

る時，このような質問紙には出てこない記憶をどのように扱ったらよいのだろうか。

また，言いたいけれども，うまく言語化できない自伝的記憶もある。複雑な視覚的記憶や表現しにくい聴覚的記憶，あるいは味や匂いの記憶など，確かな表象はあっても言語化できないこともある。このような自伝的記憶にも，私達は留意すべきであろう。新しい研究方法の工夫が期待される。

(5) 研究内容の取り扱いや，研究対象者への影響などに関して，倫理的問題に配慮する必要がある

この問題を強調しすぎると，研究の発展を阻害することにもなりかねないが，人間を研究対象としている研究者にとっては，大変重要なことである。冒頭でも述べたように，個々人の人生は，尊厳と個性を有している。従ってその記憶内容を公表する場合には，プライバシーの問題に十分に注意すべきである。具体的なデータやケースを部分的でも発表する場合には，その本人が他人から特定されることのないようにするのであるが，研究上，必要性が高い場合には，難しい問題である。本人の了承など，研究者としての必要な手立てはとっておくべきである。

また，調査や実験に参加した対象者の中には，「思い出したくないことまで思い出してしまい，その後，大学生活に不適應を起こした」という事実もある。自伝的記憶を想起することによって起きるさまざまな心理的影響に，配慮することも研究者の倫理ではないだろうか。

コメントへの回答

佐藤 浩一

太田先生のコメントは(1)～(5)のいずれも、非常に重要な問題を的確に指摘したものである。しかし自ら記しておられるように、「研究の発展を阻害」しかねない問題も含んでいる。ここでは研究との折り合いをつける方向で議論したい。

(1)想起できない記憶

この問題は、さらに二つに分けて検討したい。一つは、自伝的記憶の想起内容や想起プロセスが手続き記憶・潜在記憶に支えられているという点である。この点は、不随意的想起(Berntsen, 1998)の研究に組み込んで検討できるのではなからうか。例えば、(a)動作などの手続き記憶が自伝的記憶を引き出す手がかりとしてどの程度有効か、(b)手がかりとなった出来事と想起された出来事の間にはいかなる類似性があるのか - 概念的な類似性か、知覚的な類似性か - , といった点を検討することで、自伝的記憶と手続き記憶・潜在記憶との関連についてのヒントが得られるだろう。

第二は、自伝的記憶の機能については、意識化できない記憶の存在を抜きにしては考えられないという指摘である。確かに、効率的に機能する指示機能を考えると、関連する自伝的記憶をいちいち想起して、現在の問題にあてはめていたのでは遅いということがある。その意味では、潜在的に想起され、意識的な処理を経る間もなく生かされるというのが、自伝的記憶が有効に機能するための一つの条件である。この問題についても、不随意的に想起された自伝的記憶の機能(神谷, 2003)を検討することで、有益な知見が得られるだろう。

なお第一・第二いずれの問題とも関連して、次のことを指摘しておきたい。意識化できない手続き記憶や潜在記憶とのつながりを強調すると、自伝的記憶のなかでも特に自動化した想起過程や機能を強調することにつながる。それは

きわめて効率的なシステムかもしれない。しかしこうしたシステムに依存することは、我々の自己や自伝的記憶が固定化し、柔軟性を失う危険性もはらむことになる。

(2)自伝的記憶における「自己」

記憶理論全体の中で、エピソード記憶や意味記憶との関連を考慮して、自伝的記憶の位置づけを議論しなければならないことは、言うまでもない。システムとしての自伝的記憶の独自性を主張するには、それが意味記憶やエピソード記憶あるいは社会的出来事の記憶とは構造的・機能的に異なっていることが示さなければならない。同じ研究パラダイムを用いて、自伝的記憶に関する想起や判断が、エピソード記憶や意味記憶あるいは社会的出来事の記憶とは異なるパターンを示すことを明らかにしなければならないだろう。ある記憶システムの特殊性を主張するには、慎重な検討が求められる。「フラッシュバルブ記憶」研究が始まった当初、特殊な"now-print"メカニズムで説明する仮説(Brown & Kulik, 1977)が提出されたが、それに対して、リハーサルによる説明の有効性も主張された(Bohannon, 1988)。今回のワークショップでも越智先生が、トラウマ記憶やフラッシュバルブ記憶は、感情の影響を想定しなくとも説明できることをクリアに論じておられる。

もしかしたら「自伝的記憶」を独立した特殊なシステムと考える必要はないのかもしれない。例えば、我々は何に基づいて自分の性格を判断しているのだろうか。他者の行動からその人のパーソナリティを推測するのと同じ方法で、自分についても関連する出来事を想起し判断を下しているのだとすると、あえて「自己」の特殊性を強調する必要はなくなる。これに対して、「自己について判断する時には、特定の記憶を想起することなく、関連する自己概念に直接アクセスして判断している」という仮説も考えら

れる(Klein & Loftus, 1993)。しかしその場合も、自己と他者を明確に二分する必要はなく、熟知度という次元上の差異で説明できるかもしれない。あるいは、実験室で呈示された物語文を想起する場合と、自分自身の物語(ライフストーリー)を想起する場合とでは、どこに決定的な違いがあるのだろうか。さほど大きな違いはないのかもしれない。

(3)記憶の信憑性

ここで太田先生は、二つの問題を指摘しておられる。一つは自伝的記憶の変容プロセスこそ、自伝的記憶研究のなかで「うまみ」のあるテーマではないか、という指摘である。佐藤(2003)も、大学生～中高年を対象として、自伝的記憶を繰り返し想起してもらった時に、どれほど変容するか(どれほど安定しているか)を検討している。その結果、青年に比べると中高年は、同じ出来事を同じ順序で想起する - 自伝的記憶が安定している - 傾向が強いことが見出された。自伝的記憶の変容過程(あるいはそれが固定化する過程)には重要な問題が隠されていると言って間違いはなからう。

しかしその一方で、「記憶が作り変えられる」「記憶が嘘をつく」という表現で、記憶の変容が強調されすぎているのではないかという懸念もある。Ross (e.g., Ross & Buehler, 1994a)は、潜在理論に従って記憶が変容することを指摘したが、データを詳細に検討すると、「多くは正確に想起される。しかし歪む場合もある。その場合には潜在理論から予測される方向に歪む」ということがわかるだろう。我々の記憶がそれほど歪みやすいものなら、それは自己概念の形成や指示といった重要な機能にとっても、マイナスの影響をもたらしかねない - 聴き手を愉ませるのには有効かもしれないが -。

また、記憶が正確であるかどうかという問題とは別に、想起内容が調査者に正確に伝わるかという問題も、実際の研究では起こり得る。これまでの筆者の経験では、想起し記述することに対する回答者の動機づけや表現力が、結果に

影響を及ぼすことが少なくない。経験時の学年と年齢を記入してもらったところ、それが食い違っているということもあった。質問紙で自伝的記憶を収集した場合、曖昧な報告について本人に確認することは難しい。記憶そのものの信憑性とは別に、データの信頼性を高めるためには、個別面接を併用する必要もあるだろう。

(4)言いたくない、あるいは言語化できない記憶

ここで太田先生は二つの問題を指摘しておられる。想起できない(したくない)が重要な記憶をどう扱うか、言語化できない記憶をどう扱うか、という問題である。

第一の問題は(5)の倫理面とも関連する。実際に質問紙を用いて自伝的記憶を収集すると、意外にも、非常に不快な経験にまつわる記憶も想起されることが多い。非常に不快ではあったけれども、他者に開示できるほどに自分の中で処理(整理)されているのかもしれない。また、講義の受講者に質問紙を依頼する場合、筆者(質問者)と回答者の関係が疎遠過ぎることもなく、また密接すぎることもないことが、こうした記憶の開示を可能にしているのかもしれない。回答者の報告を見る限りでは、「本当に大切な記憶は奥底にしまわれている、とは限らない」というのが、筆者の実感である。それ以上に踏み込んで、「言えないけれども、その人の中核になっている記憶」を扱うことは、自伝的記憶研究の範囲を超えているのかもしれない。しかしこれについても、具体的な内容そのものの報告は求めず、想起の鮮明度や時間経過、その記憶から連想される他の記憶を問うことは - 倫理面に十分配慮するならば - 可能であろう。そうすることで、こうした特別な記憶についても、検討を進めることが可能になると思われる。

第二に、太田先生のご指摘の通り、自伝的記憶の「感覚成分」については、ほとんど検討されていない。ただし、自伝的記憶を引き出す手がかりとしての「匂い」については、研究がおこなわれている(Herz & Schooler, 2002; 谷川原・渡辺・佐藤・斉藤・綾部・松崎・小田、

1994)。例えば Aggleton & Waskett (1999)はヴァイキング・センターを訪れた人を対象に、展示内容の記憶を6～7年後に調査した。そして館内に漂っていた独特の匂いを呈示することで、想起が促進されることを見出した。

手がかり効果ではなく、匂いの記憶そのものを検討するには、「自伝的」ではない匂いと同じ実験パラダイム(e.g., Engen & Ross, 1973)が利用できるはずだ。様々な匂いサンプルを用意して、記憶の匂いとのマッチングを行わせるのである。しかし、いったいどれほどの匂いサンプルを用意すればよいかを考えると、現実的な方法とは言い難い。Aggleton & Waskett (1999)のように独特な匂いを呈している場所を訪れ、その匂いの再認を求めるのが現実的な方法だろう。しかし、こうして匂いのみを切り離して検討するのであれば、あえて「自伝的」な匂いを扱う必要は無いのではなからうか。

匂いや味を切り離すのではなく、ある出来事の記憶を構成する一要素として考えるならば、特定の出来事の想起を求め、そのときの感覚印象の鮮明度等をきめ細かく問うことで、こうした記憶に接近することができるだろう。また(1)で述べたように、不随意的想起を検討する際に何が手がかりとして有効かを分析すれば、そこから自伝的記憶の中の感覚成分についての手がかりも得られるだろう。

(5)倫理的問題

この点については、実際の研究手続きをもって回答としたい。筆者が自由記述を中心とした質問紙法で自伝的記憶を収集する場合、以下の点に留意している。

a.実施に先だって、協力はあくまで対象者の任意であること、回答によって不快な気分になることもあるので、その場合は、協力を取りやめても差し支えないこと、を説明する。

b.分析は原則として研究者のみで行い、学生には手伝わせない。対象者は自分の回答が不特定多数の目に触れるとは考えていないからである。

c.結果のフィードバックを行う。また質問紙の余白に、記憶に関連して何らかの質問が書き添えられていることがある。その場合には、質問への回答も含めるようにする。

なお、卒業研究のテーマとして自伝的記憶を扱うことを、筆者は推奨しない。卒業研究や修士論文の場合、その対象者は同じ学内の学生になる可能性が高い。こうした人々の個人情報(想起された出来事も含まれる)が、学生を通して流出する危険性を考慮してのことである。

槇 洋一

(3)記憶の信憑性

記憶は再構成され、オリジナルな出来事の記憶は変容する。自伝的記憶を想起したときに、調査対象者がその変容に気づかないことも十分に考えられる。しかし、特に個人的出来事の報告の場合には、信憑性を確かめるのは極めて困難である。そこで、この種の研究では、調査対象者の報告は主観的事実として扱われることが多い。もちろん信憑性の問題は無視されているわけではない。二十年前の出来事を想起し、その当時の自分の日記と比較した研究(White, 2000)や移民してきた当時の出来事を兄弟それぞれからたずねた研究(Schrauf & Rubin, 2000)などもある。

しかし、自伝的記憶を扱う場合には、記憶の信憑性がないというのが問題よりも、何がどう変容して、どのように自己に組み込まれていくのかが重要ではないだろうか。オリジナルな出来事は、時間が経過するにつれて、現在の自己のライフストーリーに一致するように変容していくであろう。この変容のプロセスもバンプが生起する原因の1つになっていると考えられる。例えば、青年期に経験した自分にとって重要だと感じられる出来事は繰り返して想起されるうちに、現時点での自分の視点から再構成され、精緻化されていくであろう。

現在の自己に一致した想起をすると考えると、同一個人が同じトピックを想起しても、年代に

より内容が変化することも十分にありえる。例えば、大学生を対象にして、最近の出来事を想起させて、縦断的方法によって年齢を重ねるにつれて、どのように変化していくのかを調査する方法もあるであろう。長期的に自伝的記憶の変容を探っていくことが今後ともめられるであろう。

(4)言いたくない、あるいは言語化できない記憶

自己の中核に触れる記憶が言いたくない記憶であることは十分に考えられる。しかし、言いたくない記憶を研究対象者に強制的に報告させることには倫理的な問題がある。そのため、そのような記憶を対象にする場合には、研究対象者は回答を拒否できることが教示されている。実際に、トラウマ記憶を想起するように求めた時に、参加者のおよそ半数が回答を拒否した研究もある(Berntsen & Rubin, 2002)。想起内容を検討する場合には、そうした制約のある中で得られた回答を扱うしかないのではないだろうか。

また、手がかり語法を使用した場合は、個々の想起を報告することをもとめず、その出来事の想起に伴われる感情価、鮮明さ、重要性などを評定させることが多い。こうした方法は調査対象者のプライバシーをある程度保護しながら、言いたくない記憶を研究するためにも有効であろう。

うまく言語化できない記憶、聴覚的記憶、味や匂いの記憶は想起内容を言語的に報告してもらうことはできない。また、言語的報告ができる記憶に比べて研究も少ない。しかし、そのような記憶でも、手がかり語法と同様に、鮮明さ、重要性などを評定させることによって、間接的に想起内容の特徴を検討することができる。太田先生のご指摘のように、直接的に想起内容を測る方法は今後の課題となるであろう。

(5)倫理的問題

研究の際に、研究者個人が研究対象者に対する配慮を心がけることは重要なことである。しかし、それだけでなく第三者による検閲が必要になるであろう。その1つとして、研究機関

内に倫理委員会を設置し、研究内容が倫理的に問題がないかどうかを検討する方法がある。調査を行う前に、調査計画を報告し、研究対象者に対する配慮に不備がないのかを点検してもらう。また、結果を発表する前にも、内容が研究対象者のプライバシーを害するようなものになっていないかを点検してもらう。こうして二重に管理することで研究の方法論的不備を埋めることはできるであろう。

また、調査をする際に倫理的な問題に配慮して、言いたくない記憶は無理に言わなくてもよいと教示が与えることが重要である。しかし、単に想起することによって、参加者の精神的健康にネガティブな影響を与えていることは十分考えられる。従って、調査終了後に、研究対象者に現在の心理状態を質問することや、しばらく時間が置いてもまだネガティブな影響が続いているようならば連絡をくれるように伝えておくことも重要であろう。

下島 裕美

(3)記憶の信憑性

自伝的記憶の研究では、想起された記憶が「どの程度正確か」「どの程度変容しているか」「どの程度忘却されているか」が問題とされてきた。自伝的記憶はかなり昔の出来事、それも個人的出来事であるため正確さの確認が困難な場合が多いため、正確さ、変容の度合い、忘却の度合いを正しく評価することは困難であった。

正確さを確認しようとする研究としては、Linton (1982)、Wagenaar (1986)、神谷 (2004)が、自身を被験者として日誌法による研究を行っている。また、Fivush らは、幼児にある体験をさせてその内容を記録し、数ヶ月後、数年後に改めてその出来事について想起させるという方法をとっている(Fivush & Hamond, 1989; Fivush, Hudson, & Nelson, 1984)。Thompson (1982)は、大学生に日記をつけてもらい、後日その日記をもとに過去の想起を調査している。しかし、全情報が記録されているわけではないので、後日

新たに想起された情報が正しいものであるのか、誤想起であるのか、正確に判断することは難しい。

筆者は、自伝的記憶は必ずしも正確に想起する必要はないと考える。我々がこれからの人生を生きていく上で必要なのは、過去の事実の羅列ではなく、現在への適応と将来への展望に役立つ情報である。過去経験の中で、これからの人生にとって必要な情報は意識的に想起することができ、必要のない情報、忘却することが望ましい情報は、忘却される。変容することが現状にとって望ましい情報は、変容されて想起される。しかし、もとの情報が全く書き換えられるわけではないであろう。久しぶりに友人に出会った際、あるいは過去のアルバムを見ていた際、これまで信じていた過去は勘違いであったと認識した、あるいはなぜこんな出来事を何年も思い出すことなく過ごしていたのか、という経験をすることがあるであろう。ある状況では、その状況にあわせて過去は忘却・変容されるが、正確な情報は全く書き換えられてしまうのではなく、他の状況に出会った際には、改めて正確な情報を事実そのものとして認識することができる。自伝的記憶は、どの側面から見のかによって想起内容が全く変わってくる。このような柔軟な想起ができるかどうか、現在にいかに向く適応するか、将来に向けてポジティブに生きることができるか、を決定するのかもしれない。まさにこの想起の柔軟性を調べることに、自伝的記憶研究の醍醐味があるのではないだろうか。

また、本文中に述べたように、自伝的記憶研究では、「事実は事実としてわかっているけれども、主観的にはそうは思えないこと」がある。事実は事実として、正確な情報を保持しておかなければならないことがある。しかし、事実としてはわかっているけれど、主観的には「もっと最近に」感じたり、「もっと昔に」感じたりすることがある。事実としての自伝的記憶と主観的な自伝的記憶を共存させることにより、他者

と過去を共有しつつも現在に適応することが可能になるのではないだろうか。これからは、事実の想起だけでなく「わかっちゃいるけど…」という主観的な感覚、を扱うことが必要になってくるであろう。

(4)言いたくない、あるいは言語化できない記憶
(5)倫理的問題

(4)の「言いたくない記憶」は(5)の倫理的問題とも関係する問題であるため、(4)と(5)をあわせて回答する。

まず(4)についてであるが、出来事の内容そのものを調査する必要がない場合、想起した出来事内容を言語化して記述してもらう必要はないであろう。出来事を想起し、その想起内容については記述せずに、感情価や想起頻度など、評定のみを実施すればよい。想起した出来事を言語化しなければ、「言いたくない記憶」「言語化できない記憶」について調査することも可能となる。質問紙調査のようにラポールを形成していない実験者に対して言語化された記憶とは、先に述べた、他者と共有するための「事実としての自伝的記憶」であり、主観的要素を意識的に排除される可能性が高いが、言語化せずに評定だけさせることにより「主観的な自伝的記憶」をとりだすことが可能になるかもしれない。

自己の中核となる出来事内容について詳細に調査する場合には、面接形式の調査になることが予想される。その場合、事前に学内の倫理委員会において調査内容が倫理的に問題がないかどうか審査を受け、協力者に対しては調査目的を十分に説明した上で同意書にサインをもらい、研究発表の際には完全に匿名化する必要があるであろう。匿名化困難なケースとしては、記憶障害などのケーススタディが考えられる。記憶障害に至った経緯の説明が必要となるからである。ケーススタディにおいて匿名化が困難である場合には、その旨を説明した上で本人あるいは保護者から同意書にサインをもらう必要があるであろう。

この場合問題となるのは、協力者本人は公表

に同意したとしても、協力者の個人的記憶には協力者の家族、友人などの情報も含まれているという点である。協力者の同意が得られたとしても、他の関係者の個人情報にはそれ以上の配慮をする必要がある。

堀内 孝

本発表に直接関係のある(1)と(2)の問題を中心に議論したい。著者(堀内)の立場は、いわゆる実験室研究の系譜にあり、自伝的記憶研究の現状に対して、幾ばくかの批判的意見を有している。発表内容と一部重複する箇所もあるが、太田先生のご指摘に照らしながら、実験室研究で得られた最新の知見を援用することにより、自伝的記憶を記憶研究あるいは「社会的認知」における自己研究の中でどう位置づけることができるのかについて、簡潔に述べたい。

まず、(2)の指摘に関して、自己の記憶モデル(堀内, 2004b)に準じて説明する。自己の記憶モデルは、「社会的認知」研究の中で提唱された多くの自己の情報処理モデルを精緻化したものである。その最大の特徴は、自己に関する情報、すなわち、自己知識は、他の知識表象と同様に、人間の記憶システムに準拠して情報が処理されると考えることにある。すなわち、意味記憶システムには比較的抽象化・概念化された自己知識、すなわち、自己概念が保存されており、現実自己、理想自己、社会的自己などがその下位要素として含まれる。また、エピソード記憶システムには具体的な自分自身の体験である自伝的記憶が保存されており、それらは時系列と内容の二側面から体制化されている。そして、長期記憶から作動記憶システムに自己知識が転送され、そのときの気分や直前の事象、対人的な状況との交互作用を経ることにより、作動記憶内に作動自己(working self)、すなわち自己意識が成立する。

自己意識(作動自己)は意識の常として時間の関数として時々刻々とその内容が変化していく。ある状況下での自己意識は、ある意味で一期一

会であり、状況即応的である。その一方で、長期記憶内には自己知識が長期にわたって安定して保存され、必要に応じて検索可能であることが、自己の一貫性・連続性の感覚であるアイデンティティ感覚の基盤となっている。このように考えると、哲学上の難問といわれた自己意識の変動性と一貫性という矛盾する問題を、自己の記憶モデルでは整合的に説明することができるのである。また、自己意識には、認識する自分(主我)と認識対象の自分(客我)という二側面が同時に成立するという回帰的側面がある(James, 1890)。自己の記憶モデルでは、主我を作動記憶システムにおける中央実行系、客我を現行の作動記憶とみなすことによって、この回帰的現象を説明する。また、最近ではfMRIなどの脳画像技術の進歩に伴い、自己知識の神経学的基盤に関する検討も行われている。意味記憶システムにおける自己知識(自己概念)に関する判断、および、エピソード記憶における自己知識(自伝的記憶)の想起を扱った研究の多くにおいて、前頭前野内側部(MPFC: medial prefrontal cortex)の活性化が確認されていることから、MPFCは自己知識(の表象操作)に関する処理一般に関与している可能性がきわめて高いと考えられている(e.g., Horiuchi, Nomura, Iidaka, Sadato, Okada, & Yonekura, 2002)。ただし、その他の活性化部位に関しては二つの自己知識間で共通しておらず、例えば、自伝想起の場合、海馬、扁桃体などの活性化が報告されるのに対し、自己概念に関する判断では、帯状回などの活性化が報告されている。

このように記憶や社会的認知の自己研究ではすでに多くの研究知見が蓄積されており、自己の記憶モデル(堀内, 2004b)のように、自伝的記憶はエピソード記憶システムにおける自己知識とみなすことが妥当だと思われる。

次に(1)の指摘に関してだが、自伝想起の生成・再認モデルは、間接検索を喚起する手がかりを用い、意図的に検索した場合の想起プロセスに制約されるモデルである。そのメタ的視座に

は、すでに述べたように、自伝想起における検索の意図性と直接性の問題がある。検索時に顕在教示を行っても、その検索プロセスには記憶の意図的成分だけでなく自動的成分も含まれていることが知られているが、生成・再認モデルの検証においても、顕在的な自伝的記憶の想起における Remember 反応と Know 反応の違いについて、反応時間や後の再生率などの観点から検討が行われている(堀内, 2004a)。むしろ、より自動的成分の多い、例えば潜在記憶テストや潜在教示条件において、自伝的記憶の検索がどう行われるかについては未検討の問題であり、今後の課題としたい。

自伝的記憶研究が生態学的妥当性を標榜し、実験室研究を批判するかたちで現れたという歴史的経緯があるにせよ、このように、実験室研究の成果を自伝的記憶研究に導入するメリットは余りあるものがあると考えられる。ただし、記憶の実験室的研究では主に言語材料を使用し、比較的短期間のインターバルで記憶成績が評価されてきた。それゆえ、(3)(4)のような問題は実験的にも理論的にも十分検討されていないという適用の限界は存在する。なお、(5)の倫理的問題に関して、自伝的記憶が個人情報である以上、その扱いに関しては、カウンセリングにおける守秘義務と同等の規準が適用されるべきであろうと考えている。

越智 啓太

認知心理学的な研究から見て、自伝的記憶システムはきわめて興味深いものである。私自身は、自伝的記憶研究の探求目標は、次の2つのものではないかと考えている。第1のものは、いわば、構造的な問題であり、「人間は自伝的記憶という大量のしかもきわめて情報量が多い(と思われる)記憶をいかに貯蔵し、検索しているのか」という問題である。例えば、いま、人工知能で、数十年にわたって活動し、過去の記憶を保存し、個々の行動にそれを参照するようなシステムを作成すると考えたとして。その場合、これら

の記憶をいかに分節し、タグを付け、適切(何が適切なのかはそれ自体が問題であろうが)なときに適切な記憶を検索するというデータベースを設計するのはかなり困難なものであらうと思われる。まして、人間の脳は、その貯蔵容量も、検索スピードも限られたものである。どのようなメカニズムでこれを実現しているのかを検討することは、それ自体、人間の知的システムを検討する上では、興味深いテーマであらう。

第2は、機能的な問題である。これは、「なぜ、人間は自伝的記憶を貯蔵し、それを使用しているのか、あるいは貯蔵し使用する必要があるのか」という問題である。我々は、日々の生活の中で、過去の思い出を大切にしている、しかし、その一方で、過去の思い出に心が乱されたり、それがもとで心理的な障害が引き起こされる場合もある。このように、ある意味でやっかいな存在である自伝的記憶システムが存在している理由はいったいなんであらうか、これも解明する必要があるテーマであると思われる。後者の問題の回答は、認知心理学的なものになるよりは、むしろ哲学(自己認識や自己定義における自伝的記憶の役割について昔から論じてきたのは心理学よりもむしろ哲学であった)や進化心理学的なものになるかもしれないが……。このような観点もふまえた上で、指定討論についてのコメントを述べてみようと思う。

(1) 想起できない記憶

現代の自伝的記憶研究のほとんどは、顕在的なエピソード記憶を扱っている。具体的には、キーワードを呈示し、それより想起されたエピソードを報告させるという方法などがとられる。しかし、歴史的に見れば、自伝的記憶研究が、想起できない記憶を無視してきたわけでは必ずしもない。例えば、フロイトの精神分析モデルは、想起できないエピソード記憶が、行動に影響を与えているというものであると考えることもできる。

では、太田先生の指摘されるような、手続き的な記憶や潜在記憶はどうであらうか。これに

関しては、ほとんど扱われていないというのが現状であろう。しかし、考えてみると、自伝的手続き記憶、あるいは自伝的潜在記憶というものを、「自伝的でない手続き記憶」や「自伝的でない潜在記憶」と分けて、定義するのはなかなか困難である。もしかしたら、自伝的記憶という概念は暗黙にそれが、エピソード記憶であるということを想定しているのかもしれない(このことを明示的に記述している研究者もいる)。このあたりの問題は自伝的記憶の定義の問題を含めて、理論的にも検討していくことが必要であろう。

この問題に関して、ひとつ、気になる研究がある。それは Mischel (1968)によってなされた一連の研究である。彼は、いわゆる性格テストで測定される、我々の個人差が行動の予測には、ほとんど役に立たないということを示した。これは我々の行動は、我々自身が持っている、自己概念、自己知識、あるいは自己についての知識構造が我々の行動と独立なものであるという可能性を示している。しかし、個々人は、状況によっては、予測可能な行動を示すのも事実である。では、いったい我々が示すこの行動の一貫性はいかなるかたちで保持され、利用されているのであろうか。この現象を説明していく場合に、潜在的、手続き的な自伝的知識というものの可能性が出てくるのかもしれない。

(2)自伝的記憶における「自己」

自伝的記憶とは何かというテーマについては、「自伝的記憶」と題された本の多くが、1章をその記述に費やしており、非常に重要な問題であると考えられている(Brewer, 1986, 1996)。しかし、自伝的記憶と他のエピソード記憶の違いについて、議論し、そこに線をひくことに意味があるとすれば、それらの間に、何か機能的な違いが存在する場合であろう。逆に言えば、これらの間に機能の差がなければ、違ったメカニズムとして区別する必要はないことになる。現在のところ、このような違いについては、明確になっていない。もしかすると、自伝的記憶と

いう存在は、他のエピソード記憶と違った存在ではないのかもしれない。

(3)記憶の信憑性

自伝的記憶を実験的に研究する場合、何らかの実験条件下で、自伝的記憶を想起させ、その内容の特性や、キューの呈示から自伝的記憶想起までの時間を従属変数とする場合が多い。このような実験条件では、想起された記憶の信憑性については、ほとんど評価されない。自伝的記憶の信憑性は、個人個人のもの、極端な場合は被験者のみが体験していることなので、實際上、その信憑性を判断するのは困難である。ただし、いくつかの研究では、この信憑性を判断するための工夫を行っている。例えば、同じ体験を共有した家族などの証言とつきあわせるといった方法、日記の内容と照らし合わせるという方法、客観的な記録が残っている出来事について想起させる方法、体験直後に一度体験を記録しておき、想起したものをそれと照らし合わせるといった方法などである(Howes, Siegel, & Brown, 1993; Kihlstrom & Harackiewicz, 1982)。これらの研究では、報告された自伝的記憶はそれなりに信用できるものが多いという結果が得られる場合が多い。しかし、キューワードを呈示して、自伝的記憶を想起させる課題や、一定時間にたくさんの自伝的記憶を想起させるような実験では、想起された記憶が本当のものであるかを確認する手段はあまりない。

ここで、問題となってくるのは、我々の記憶はしばしば、現実にはなかったことを想起させるということである。いわゆる「フォールスメモリー」の問題である。Hyman, Husband, & Billings (1995)らは一連の研究で、被験者に実際にはなかった出来事の記憶を想起させるようにし向け、いくつかの出来事については、それを想起させることに成功している。もし、このようなことが頻繁に生じるのであれば、我々が想起する自伝的記憶の内容はきわめて信頼性の低いものになってしまうであろう。

では、フォールスメモリー現象は、本当に頻

繁に生じる現象なのであろうか。まず、彼らの研究を追試してみれば、明らかであるが、フォールスメモリーを意図的に作り出すのは、実は、なかなか困難である。特に実際になかった出来事を「あった」と報告させるのは、難しい(Loftus型の事後情報効果などによって、情報の一部をゆがめたり、変化させることは比較的容易である)。これから考えると、フォールスメモリーは現象として存在はするが、それほど気にする現象ではないと言うことになる。

しかし、その反面、自伝的記憶の変容を、容易に行ってしまうタイプの人が、実際には、かなり存在するように思われる。いわゆる「過去の出来事を自分の都合の良いように改変し、それを信じている」人がいるのである。このような人は、自己愛型パーソナリティの人に多いと思われるが、心理臨床の現場では、このような事例にしばしば遭遇する。これは、自伝的記憶の変容が、外的に導入されるのは非常に困難であるが、何らかの自己メカニズム、例えば、自己一貫性メカニズムなど、との関連性の中では、非常に容易に変形されうるということを示している。

このような事例は、実は我々の多くは、しばしば体験し心理学の中でも、すでにいくつか指摘されている。例えば、態度変容実験の後に、態度変容前の自分の態度を想起させると、実際よりも態度変容後の態度に近い値を報告する現象(Goethals & Reckman, 1973)や、出来事が発生した後に、発生前の状況を報告させると、その出来事が発生するであろうと考えていたと思いやすくなるなどの現象(Kahneman, Slovic, & Tversky, 1982)はこれと関連しているのかもしれない。

このように、外的な刺激や誘導によってフォールスメモリーを作り出すというのはなかなか困難であるが、自己概念やセルフスキーマとの関連では、フォールスメモリー形成ははより容易に生じてしまう可能性があるのである。こう考えると、自伝的記憶の「信憑性」を問題にす

ることは、そのシステムを明らかにするためには非常に重要な問題かもしれない。

(4)言いたくない、あるいは言語化できない記憶

「想起してもいいたくない記憶」をどのように扱うかの問題については困難な問題がある。第1は倫理的な問題であり、そもそもこのような記憶を想起させる実験に問題がないのか、と言う点である。この点については(5)で検討することにする。第2の問題点として、実際に記憶実験ではこのような記憶は報告されないが故に、報告された研究のみを対象にしているのは、結果にバイアスがかかるということである。この点に対する対処方法としては、想起内容自体を報告させないという方法で、ある程度は防げるかもしれない。第3の問題点としては、このような記憶が自己概念との関係で実は最も重要であるという指摘である。例えば、フロイトは、幼少時の性に関する自伝的記憶が個人のパーソナリティ形成や病理的な現象に密接な関係があると指摘している。また、PTSDの症状のある人にとっては、まさに想起してもいいたくない記憶によって、日々、苦しめられ、自己の行動が変わってきているのである。この点は太田先生のご指摘の通りであり、今後、実験方法や研究方法を考えていく必要があるかもしれない。むしろ、このような範囲の研究は臨床心理学の研究として行う必要があるかもしれない。

次に、「言えない記憶」、つまり、匂いや音や皮膚感覚など「感じ」についての記憶である。おなかが痛くなった時に「これは前の痛みと同じ」と思ったり、心臓に痛みが走って、「この痛みは体験したことがない」と思うことなどがあるが、これは、「痛み」の感じについての記憶が存在することを意味し、しかも、その中には言葉にできないものを含んでいる(Salovey, Sieber, Jobe, & Willis, 1994)。これは痛みだけでなく、より複雑な感情、例えば、愛についても存在する。具体的には、人を好きになった場合の恋心について、「こんな気持ちになったのははじめて」といえる(過去の自伝的な恋愛感情を保持してい

なければ、こんな気持ちになったのは初めてかどうかを判断することはできない)のは、このような「いえない自伝的記憶」を反映している可能性がある。この点についても実験方法を考えていく必要があるだろう。

(5)倫理的問題

実験の倫理性に関しては、特に健常者を対象とした記憶研究では、今まであまり問題にされてこなかった。しかし、太田先生のご指摘のように、自伝的記憶というその個人のまさにパーソナルな問題を対象として研究する場合には、この論点を避けることはできないであろう。

ただ、この問題に関して、従来の自伝的記憶研究が全く無視してきたかといえ、必ずしもそうではない(残念ながら、無視していると思われる研究も存在する)。いくつかの工夫は、今までにもなされてきた。例えば、最もよく用いられるのは、自伝的記憶想起は求めるが想起した内容を報告する必要はない、という方法である。この場合、従属変数としては、キーワード呈示から自伝的記憶想起までの反応時間や、想起した自伝的記憶について内容は報告しなくてもいいが、その特性(色がついているか否か、感情価など)について報告するなどの方法である。

しかし、太田先生の指摘されるように、「それを思い出す」ということ自体が、すでに大きな問題をはらんでいるとあって良い。特に自伝的記憶と感情の関係についての研究を行う場合、不快な体験やトラウマ体験を想起してもらうものであるために、その問題は顕著である。この点を解決するためには、実験上の工夫に加えて、実験実施に際してのインフォームドコンセントが必要になるとと思われる。現在考えられる、倫理上の配慮点を箇条書きにすると以下になるだろう。

a.あらかじめ、実験計画を開示した上で実験協力者(被験者)に参加を要請する。

b.実験参加を強制しない(例えば、講義時間を使用した集団実験や、実験者と被験者に地位の差がある場合は実験実施に問題があるかもしれ

ない)。

c.実験協力者(被験者)をだます実験をおこなわない。

d.個人データの管理に留意する。場合には、質問紙や調査票などを返却する。

e.デブリーフィングを行う。

f.特に、ネガティブな情動を喚起してしまう可能性がある場合には、質問紙などで大量なデータをとるかたちではなく、できるだけ、面接形式か、個別実験方式で研究を行う。

g.ネガティブな体験を想起させないで目的を達成できる場合には、ネガティブな体験を想起させない。

h.最小の実験で、最大の効果を得るために、無意味な探索的実験をできるだけ行わないようにする。

自伝的記憶研究は、ある意味で臨床心理学研究でもあるということを理解して研究を行っていく必要があるだろう。

文献

- Aggleton, J. P. & Waskett, L. (1999). The ability of odours to serve as state-dependent cues for real-world memories: Can Viking smells aid the recall of Viking experiences? *British Journal of Psychology*, **90**, 1-7.
- Bavelas, J. B., Coates, L., & Johnson, T. (2000). Listeners as co-narrators. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 941-952.
- Berntsen, D. (1998). Voluntary and involuntary access to autobiographical memory. *Memory*, **6**, 113-141.
- Berntsen, D. & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic and involuntary memories. *Psychology & Aging*, **17**, 636-652.
- Bluck, S. & Alea, N. (2002). Exploring the functions of autobiographical memory: Why do I remember the autumn? In J. D. Webster & B. K. Haight (Eds.), *Critical advances in reminiscence work: From theory to application*, 61-75. New York, NY: Springer Publishing Company.
- Bohannon, J. N. (1988). Flashbulb memories for the Space Shuttle disaster: A tale of two theories. *Cognition*, **29**, 179-196.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*, 25-49. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brewer, W. F. (1996). What is recollective memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: studies in autobiographical memory*, 19-66. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, R. & Kulik, J. (1977). Flashbulb memories. *Cognition*, **5**, 73-99.
- Bruner, J. (1994). The "remembered" self. In U. Neisser & Fivush (Eds.), *The remembered self: Construction and accuracy in the self-narrative*, 41-54. New York, NY: Cambridge University Press.
- Chu, S., & Downes, J. J. (2000). Long live Proust: The odour-cued autobiographical memory bump. *Cognition*, **75**, B41-B50.
- Cohen, G., Conway, M. A., & Maylor, E. A. (1994). Flashbulb memories in older adults. *Psychology and Aging*, **9**, 454-463.
- Cohen, G. & Faulkner, D. (1988). Life span changes in autobiographical memory. In M. M. Gruneberg & P. E. Morris (Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues, Vol. 1: Memory in everyday life*, 277-282. New York, NY: John Wiley & Sons.
- Conway, M. A. & Haque, S. (1999). Overshadowing the reminiscence bump: Memories of a struggle for independence. *Journal of Adult Development*, **6**, 35-44.
- Conway, M. A. & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- Conway, M. A. & Rubin, D. C. (1993). The structure of autobiographical memory. In A. F. Collins, S. E. Gathercole, M. A. Conway & P. E. Morris (Eds.), *The theories of memory*, 103-137. Hove, East Sussex: Lawrence Erlbaum Associates..
- Cowan, N. & Davidson, G. (1984). Salient childhood memories. *The Journal of Genetic Psychology*, **145**, 101-107.
- Csikszentmihalyi, M. & Beattie, O. V. (1979). Life themes: A theoretical and empirical exploration of their origins and effects. *Journal of Humanistic Psychology*, **19**, 45-63.
- Dennett, D. C. (1991). *Consciousness explained*. Boston, MA: Little, Brown & Company.
- Engen, T. & Ross, B. M. (1973). Long-term memory of odors with and without verbal descriptions. *Journal of Experimental Psychology*, **100**, 221-227.
- Fitzgerald, J. M. (1988). Vivid memories and the reminiscence phenomenon: The role of a self narrative. *Human Development*, **31**, 261-273.
- Fivush, R. (1984). Learning about school: The development of kindergarteners' school scripts. *Child Development*, **55**, 1697-1709.
- Fivush, R. (1988). The function of event memory: Some comments on Nelson and Barsalou. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Traditional and ecological approaches to the study of memory*, 277-283. New York, NY: Cambridge University Press.
- Fivush, R., Gray, J. & Fromhoff, F. (1987). Two year olds talk about the past. *Cognitive Development*, **2**, 393-409.
- Fivush, R. & Hamond, N. R. (1989). Time and again: Effects of repetition and retention interval on 2 year olds' event recall. *Journal of Experimental Child Psychology*, **47**, 259-273.
- Fivush, R., Hudson, J. A., & Nelson, K. (1984). Children's long-term memory for a novel event: An exploratory study. *Merrill-Palmer Quarterly*, **30**, 303-316.
- Fivush, R. & Reese, E. (2002). Reminiscing and relating: The development of parent-child talk about the past. In J. D. Webster & B. K. Haight (Eds.), *Critical advances in reminiscence work: From theory to application*, 109-122. New York,

- NY: Springer Publishing Company.
- Friedman, W. J. (1992). Children's time memory: The development of a differentiated past. *Cognitive Development*, **7**, 171-187.
- Friedman, W. J. (1993). Memory for the time of past events. *Psychological Bulletin*, **113**, 44-66.
- Fromholt, P., Mortensen, D. B., Torpdahl, P., Bender, L., Larsen, P., & Rubin, D. C. (2003). Life-narrative and word-cued autobiographical memories in centenarians: Comparisons with 80-years-old control, depressed, and dementia groups. *Memory*, **11**, 81-88
- 蒲生忍 (2003). 医学研究の倫理. 『杏林医学会雑誌』, **34**, 313-317.
- Gardiner, J. M. (1988). Functional aspects of recollective experience. *Memory & Cognition*, **16**, 309-313.
- Gergen, K. J. & Gergen, M. M. (1988). Narrative and the self as relationship. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology, Vol. 21: Social psychological studies of the self: perspectives and programs*, 17-56. San Diego, CA: Academic Press.
- Goddard, L., Dritschel, B., & Burton, A. (2001). The effects of specific retrieval instruction on social problem-solving in depression. *British Journal of Clinical Psychology*, **40**, 297-308.
- Goethals, G. R. & Reckman, R. F. (1973). The Perception of consistency in attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 491-501.
- Grene, M. (1993). The primacy of the ecological self. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal source of self-knowledge*, 112-117. New York, NY: Cambridge University Press.
- Habermas, T. & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, **126**, 748-769.
- Herz, R. S. & Schooler, J. W. (2002). A naturalistic study of autobiographical memories evoked by olfactory and visual cues: Testing the Proustian hypothesis. *American Journal of Psychology*, **115**, 21-32.
- Holmes, A. & Conway, M. A. (1999). Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development*, **6**, 21-34.
- 堀内孝 (1998). 自己認知の多次元性と自己関連付け効果. 『心理学研究』, **68**, 484-490.
- 堀内孝 (2002). 自己記述課題と自伝想起課題の区分に関する研究 - 潜在指示における概念駆動テストを使用した検討 -. 『心理学研究』, **73**, 82-87.
- 堀内孝 (2004a). エピソード検索における回想経験と自他の違いが、後続の再生テストに及ぼす影響. 『心理学研究』, **75**, 印刷中.
- 堀内孝 (2004b). 自己と認知. 大島尚・北村英哉 (編) 『認知の社会心理学』 北樹出版.
- 堀内孝 (未発表). 自己関連づけ効果の生起メカニズム. 平成 13 ~ 14 年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(A), 課題番号 13710043).
- 堀内孝・藤田哲也 (2003). 自伝想起課題を使用した場合の自己関連付け効果に及ぼすテスト時の想起意図の役割. 『日本心理学会第 67 回大会発表論文集』, 816.
- Horiuchi, T. (2003). Intentional use of memory in autobiographical task and self-reference effect. *The Psychonomic Society 44th Annual Meeting*, 62.
- Horiuchi, T., Nomura, M., Iidaka, T., Sadato, N., Okada, T., & Yonekura, Y. (2002). Differences between self referent encoding and other encodings: An event-related fMRI study. *NeuroImage. 8th International Conference on Functional Mapping of Human Brain*, 308.
- Howes, M., Siegel, M., & Brown, F. (1993). Early childhood memories: Accuracy and affect. *Cognition*, **47**, 95-119.
- Hudson, J. A., Fivush, R., & Kuebli, J. (1992). Scripts and episodes: The development of event memory. *Applied Cognitive Psychology*, **6**, 483-505.
- Hudson, J. A. & Nelson, K. (1986). Repeated encounters of a similar kind: Effects of familiarity on children's autobiographical memory. *Cognitive Development*, **1**, 253-271.
- Hyman, I. E., Husband, T. H., & Billings, F. J. (1995). False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **9**, 181-197.
- Jacoby, L. L. & Hollingshead, A. (1990). Toward a generate/recognize model of performance on direct and indirect tests of memory. *Journal of Memory and Language*, **29**, 433-454.
- James, W. (1890). *The principles of psychology*. New York, NY: Holt.
- Jansari, A. & Parkin, A. J. (1996). Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology & Aging*, **11**, 85-91.
- Kahneman, D., Slovic, P., & Tversky, A. (1982). *Judgement under uncertainty: Heuristics and biases*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 神谷俊次 (1994). 自伝的記憶の安定性. 『アカデミア(人文社会科学編)』, **59**, 119-135.
- 神谷俊次 (2003). 不随意記憶の想起に関する考察 - 想起状況の分析を通じて -. 『心理学研究』, **74**, 444-451.

- 神谷俊次・伊藤美奈子 (2000). 自伝的記憶のパースナリティ特性による分析. 『心理学研究』, **71**, 96-104.
- Kihlstrom, J. F. & Harackiewicz, J. M. (1982). The earliest recollection: A new survey. *Journal of Personality*, **50**, 134-148.
- Kitayama, S., Markus, H. R., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. (1997). Individual and collective processes in construction of the self: Self-enhancement in the United States and self-criticism in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1245-1267.
- Klein, S. B. & Loftus, J. (1993). The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. In T. K. Srull & R. S. Wyer, Jr. (Eds.), *Advances in social cognition* V, 1-49. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Klein, S. B., Loftus, J., & Burton, H. A. (1989). Two self reference effects: The importance of distinguishing between self-descriptiveness judgments and autobiographical retrieval in self referent encoding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 853-865.
- Klein, S. B., Loftus, J., & Plog, A. E. (1992). Trait judgments about the self: Evidence from the encoding specificity paradigm. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 730-735.
- Klein, S. B., Loftus, J., Trafton, J. G., & Fuhrman, R. W. (1992). Use of exemplars and abstractions in trait judgments: A model of trait knowledge about the self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 739-753.
- 小林多寿子 (1987). <都市化>とノスタルジー - 都市における奄美出身者の心性 -. 『年報人間科学(大阪大学人間科学部)』, **8**, 23-40.
- 小林多寿子 (1998). 戦争体験と自分史 - 「記憶の共同体」を求めて -. 『日本女子大学紀要人間社会学部』, **8**, 127-140.
- Langer, E. (1989). *Mindfulness*. Cambridge, MA: Perseus Books.
- Linton, M. (1982). Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser (Ed.), *Memory Observed: remembering in natural contexts*, 77-81. San Francisco: Freeman.
- McAdams, D. P., Hart, H. M., & Maruna, S. (1998). The anatomy of generativity. In D. P. McAdams & de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation*, 7-43. Washington, DC: American Psychological Association.
- Mischel, W. (1968). *Personality and Assessment*. New York: John Wiley and Sons. (詫摩武俊監訳 (1992). 『パーソナリティの理論 - 状況主義的アプローチ』 誠信書房)
- Neimeyer, G. J. & Metzler, A. E. (1994). Personal identity and autobiographical recall. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*, 105-135. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.105-135.
- Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal source of self-knowledge*, 3-21. New York, NY: Cambridge University Press.
- Neisser, U., & Harsh, N. (2002). Phantom flashbulbs: False recollections of hearing the news about *Challenger*. In E. Winograd & U. Neisser. (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb" memories*, 9-31. New York, NY: Cambridge University Press.
- Nelson, K. (1992). Emergence of autobiographical memory at age 4. *Human Development*, **35**, 172-177.
- Nelson, K. (2003). Self and social functions: Individual autobiographical memory and collective narrative. *Memory*, **11**, 125-136.
- 野村晴夫 (2002). 高齢者の自己語りと自我同一性との関連 - 語りの構造的整合・一貫性に着目して -. 『教育心理学研究』, **50**, 355-366.
- 野村信威・橋本幸 (2001). 老年期における回想の質と適応との関連. 『発達心理学研究』, **12**, 75-86.
- 野村豊子 (1998). 『回想法とライフレビュー』 中央法規.
- 越智啓太 (1997). 目撃証言の個人差 - 批判的展望と展開 -. 『犯罪心理学研究』, **34**, 9-14.
- 越智啓太・木村晴 (2001). ト라우マ記憶の想起抑制意図モデル. 『日本心理学会第 65 回大会発表論文集』, 406.
- 越智啓太・太田誠 (1994). イベントメモリーの想起内容(3) - 最初期記憶の想起内容の感情価と気分一致効果 -. 『日本発達心理学会第 5 回大会発表論文集』, 203.
- 越智啓太・相良陽一郎 (2003). フラッシュバルブメモリーの変容と忘却. 『認知科学テクニカルレポート』, TR-48.
- 尾原裕美 (1994). 記憶における時間的体制化の発達と幼児期記憶の持つ意味. 慶應義塾大学社会学研究科修士論文(未公開).
- 尾原裕美・小谷津孝明 (1994). 自伝的記憶の時間的体制化. 『日本教育心理学会第 36 回総会発表論文集』, 413.
- Pillemer, D. B. (1992). Remembering personal circumstances: A functional analysis. In E. Winograd & U. Neisser (Eds.), *Affect and accuracy in recall: Studies of "flashbulb"*

- memories, 236-264. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pillemer, D. B. (1998). *Momentous events, vivid memories*. Cambridge: Harvard University Press.
- Pillemer, D. B. (2001). Momentous events and the life story. *Review of General Psychology*, **5**, 123-134.
- Pillemer, D. B. (2003). Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episodes. *Memory*, **11**, 193-202.
- Pillemer, D. B., Picariello, M. L., Law, A. B., & Reichman, J. S. (1996). Memories of college: The importance of specific educational episodes. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*, 318-337. New York, NY: Cambridge University Press.
- Ross, M. & Buehler, R. (1994a). Creative remembering. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*, 205-235. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, M. & Buehler, R. (1994b). On authenticating and using personal recollections. In N. Schwarz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical memory and the validity of retrospective reports*, 55-69. New York, NY: Springer-Verlag.
- Ross, M. & Wilson, A. E. (2002). It feels like yesterday: Self-esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 792-803.
- Rubin, D. C. (2000). The distribution of early childhood memories. *Memory*, **8**, 265-269.
- Rubin, D. C. & Berntsen, D. (2003). Life scripts help to maintain autobiographical memories of highly positive, but not highly negative, events. *Memory & Cognition*, **31**, 1-14.
- Rubin, D. C., Rahhal, T. A., & Poon, L. W. (1998). Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition*, **26**, 3-19.
- Rubin, D. C. & Schulkind, M. D. (1997a). Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-, 35-, and 70-year-old adults. *Psychology & Aging*, **12**, 524-535.
- Rubin, D. C. & Schulkind, M. D. (1997b). The distribution of autobiographical memories across the lifespan. *Memory & Cognition*, **25**, 859-866.
- Salovey, P., Sieber, W. J., Jobe, J. B., & Willis, G. B. (1994). The recall of physical pain. In N. Schwartz & S. Sudman (Eds.), *Autobiographical memory and the validity of retrospective reports*, 89-106. New York, NY: Springer-Verlag.
- 佐藤浩一 (2000). 思い出の中の教師 - 自伝的記憶の機能分析 - . 『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』, **49**, 357-378.
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶. 井上毅・佐藤浩一 (編著), 『日常認知の心理学』, 70-87. 北大路書房.
- 佐藤浩一 (2003). 自伝的記憶の安定性 - 想起内容と想起順序の検討 - . 『日本認知心理学会第1回大会発表論文集』, 137.
- Schrauf, R. W. & Rubin, D. C. (1998). Bilingual autobiographical memory in older adult immigrants: A test of cognitive explanations of the reminiscence bump and the linguistic encoding of memories. *Journal of Memory & Language*, **39**, 437-457
- Schrauf, R.W. & Rubin, D.C. (2000). Internal languages of retrieval: The bilingual encoding of memories for the personal past. *Memory & Cognition*, **28**, 616-623.
- Shimojima, Y. (2002). Memory of elapsed time and feeling of time discrepancy. *Perceptual and Motor Skills*, **94**, 559-565.
- Shimojima, Y. (投稿中). How to feel negative past as a part of current self.
- 下島裕美・有馬明恵 (2003). 高齢者の自伝的記憶 - レミニセンスバンプと時間のずれ感覚 - . 『日本心理学会第67回大会発表論文集』, 839.
- 谷川原千恵美・渡辺久美子・佐藤親次・齋藤幸子・綾部早穂・松崎一葉・小田晋 (1994). ニオイによる高齢者の"なつかしさ"の喚起. 『人間工学』, **30**, 51-56.
- Thompson, C. P. (1982). Memory for unique personal events: The roommate study. *Memory & Cognition*, **10**, 324-332.
- Tulving, E. (1983). *Elements of episodic memory*. London: Oxford University Press.
- Tulving, E. (1993). Self-knowledge of amnesic individual is represented abstractly. In R. S. Wyer & T. K. Srull (Eds.), *Advances in social cognition V*, 147-156. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 植之原薫 (1993). 同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き. 『発達心理学研究』, **4**, 154-161.
- Wagenaar, W. A. (1986). My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Webster, J. D. (1997). The reminiscence functions scale: a replication. *International Journal of Aging and Human Development*, **44**, 137-148.
- Webster, J. D. (2003). The reminiscence circumplex and autobiographical memory functions. *Memory*, **11**, 203-215.

- Webster, J. D. & Cappeliez, P. (1993). Reminiscence and autobiographical memory: Complementary contexts for cognitive aging research. *Developmental Review*, **13**, 54-91.
- White, R. (2000). Memory for events after twenty years. *Applied Cognitive Psychology*, **16**, 603-612.
- Wilson, A. & Ross, M. (2003). The identity function of autobiographical memory: Time is on our side. *Memory*, **11**, 137-149.
- Woike, B., Mcleod, S., & Goggin, M. (2003). Implicit and explicit motives influence accessibility to different autobiographical knowledge. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1046-1055.
- Wright, D. B. & Nunn, J. A. (2000). Similarities within event clusters in autobiographical memory. *Applied Cognitive Psychology*, **14**, 479-489.
- 山崎晃男 (2001). 「教訓」の提示または産出による類推的問題解決の促進. 『教育心理学研究』, **49**, 21-30.